國語 卷六

375.9
Iwl
資料室

42043
教科書文庫
4
810
41-1941
200030
2251

教科書文庫
4
810
41-1941
2000302251

昭和十六年十一月二十一日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用

岩波編輯部編

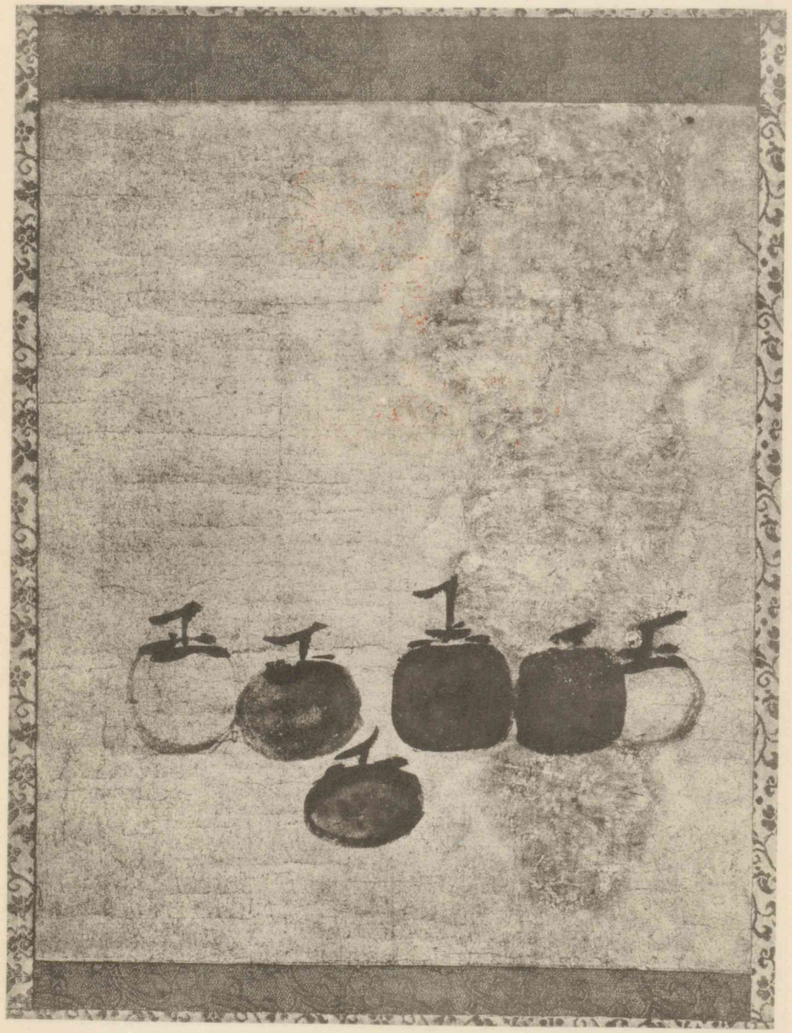
國語

改訂版

岩波書店刊

広島大学図書
2000302251

資料室
375.9
Iw1



柿　圖　　傳牧溪筆

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 26465 圖書

國語　卷六　目次

一　秋……綱島梁川……一
二　神ほぎ……蒲原有明……四
三　爐の火……柳田國男……七
四　松下村塾……德富蘇峰……一五
五　天寵……森鷗外……二五
六　機……佐藤春夫……四三
七　不動智……澤庵……五八

一八 雜煮……與謝蕪村……六二
一九 月の兎……良寛……六四
二〇 藝能逸話……（古今著聞集）……六六
二一 人道……（二宮翁夜話）……七二
二二 勞働……內村鑑三……七八
二三 愛國者福澤諭吉……小泉信三……八二
二四 米國の一面……厨川白村……九五
二五 鎭西八郎爲朝……（保元物語）……一〇一
二六 元寇……三宅雪嶺……一〇九
二七 日蓮上人……高山樗牛……一一九

二八 狐塚……（續狂言記）……一二四
二九 足跡……大島亮吉……一三四
二〇 井伊大老……中村吉藏……一四〇
二一 出盧……土井晚翠……一五六
二二 人間の價値……安倍能成……一六二

廣島大學圖書之印

綱島梁川
名は榮一郎
倫理學者　思想家
岡山縣の人
明治四十年歿
年三十五

あれこれを云々
あれこれを集
めて春は朧か
な
（松尾芭蕉）

國語　卷六

一　秋

綱島梁川

あれこれをあつめて霞む春の朧を、人生の夢とも見ば、秋は直ちにこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れいづる節くれだちたる樹身、枯芝生の底より躍りいづる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。中にも秋の力を最も強く瞻（ゆたか）に言ひいづるものは、黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りていはく、「われ嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路たま〳〵、夕空鮮かに結び出でたる赤柿の累々たるを見

蕪村　與謝蕪村　畫家　俳人　攝津國（大阪府）の人　天明三年（二四四三）歿　年六十八

抱一　酒井抱一　名は忠因　畫家　文人　播磨國（兵庫縣）姫路の藩主酒井忠以の弟　文政十一年（二四八八）歿　年六十八

て、始めて秋こゝにありと叫びき」と。げにも、秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものありとせば、そは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿、その全幅の表現を得たる趣あるにあらずや。そのむかし、蕪村・抱一などいふ畫家が、寥々たるこの一物に大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く隈なく淋漓揮灑し出せる詩眼、流石に凡にはあらざりけり。

見よ、秋の潭（ふち）に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帶び、星に聲あり。落葉に埋るゝ枯井の水、猶鬢眉を鑑（てら）すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省を誘ふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟・地籟の砰湃として厲しき、あはれ、秋の萬象、何物か空明・照徹・剛克・雄健の一氣を以て貫ぬかざる、何物か哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接するなり。秋は何等の天文・地采の形式を藉らざる裸體のまゝなる思想なり。そは如々たり、故に明瑩なり、澄徹なり、而して又充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、凡て名殘なく脫ぎすてて、露はなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くも又雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。秋に一味の文采ありとせば、白蘋・紅蓼の裳裾、蘆花淺水の帶、桔梗・刈萱・尾花が波の袂も輕き姿なるべし。あはれ、その澹如たる涼しさは、かの哲人・道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟、秋の力は、その衣に非ずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。（梁川全集）

二 神ほぎ

蒲原有明
名は隼雄
詩人
東京市の人
明治九年生

晴れわたりたる秋の日なり。
爽やかなる空の鏡に
（穢れにし都會も今日や禊ぐらむ。）
映りかぎろふ銀杏の高樹。

ゆゆしく、いつくしき銀杏樹の
淨まはりたる裝に
えもいひがたき

秋の葉の淡き黃金の光。

あまりにも淸しきその姿見て
わがこころ、都會の
慘ましき刺激に疲れたる
甲斐なきこころは、今、忍び泣く。

威も高に、かつ妙なる注連木よ、
日影そのよそほひを照らせば、
ここに黃金の神祝なして

聲無き聲のかがやきは天を搖する。
げにも產土の神の森ぬきんでて
孤り立つ銀杏の高樹、その奇魂を
爪立ちて仰ぎ崇む。しかすがに
わが悲しみは更にまた深まさりゆくかな。

〔出所〕有明詩抄

三 爐の火

柳田國男

柳田國男
民間傳承研究家
元貴族院書記官長
兵庫縣の人
明治六年生

火の最も原始的なる魅惑力は、炎であり、光であつた。子供などは何の用も無い場合にも、物を燃やして突如として咲く花のあでやかさを賞翫しようとした。暗黑の不安を追ひ拂ふ爲には、跳ねてぱち〳〵と音を立てるやうな、豆がら、馬醉木の類をまじへて焚く必要さへ認められた。

必ずしも、巖窟の穴の奥に隱れた大昔に限らず、家を建て、簾を垂れて住み始めてからずつと後まで、窓は出來るだけ高く小さく、戸を閉ぢ、壁を塞いで、雨であれ、風であれ、あらゆる外から來るものを總括して、畏れ且防衞してゐた世の中に於ては、爐の火は誠にたゞ一つの家の中の光明であつた。

月は洩れの歌
月はもれ雨は
たまれと思ふ
にはしづがふ
せやを葺きぞ
わづらふ
（撰集抄）

月は洩れ、雨は漏るなと古歌にもある通り、耀く青空の光ばかりを内に迎へ入れる方法は、以前には無かつたのである。それが、今日のやうに、どの室も明るく、最早爐の火に炎と光明とを仰ぐことを必要とせぬまでになつたのは、單なる人間の智慮、分別といはんよりも、寧ろ具體的に、紙の力、あかり障子の功勞といつた方が當つてゐる。

其の後、紙は追々に硝子に取つて代られ、終には日中の電氣燈とまで進んで來て、人は如何なる地下室の底ででも、働き得るやうになつたのであるが、それは必ずしも結構なことのみでないかも知れぬ。たゞ、少くとも、數千年來の火の光を斷念し、嘗ては荒神樣とまで尊信畏服してゐたものを、今日の如く自由自在に制御するやうになつたのは、何といつても新なる事業であり、又自信ある勇氣の獲物であつた。

人間が家を持ち、家族といふものを引纏め得たのは、火の發見の結果といつてよろしい。光と溫度と食物との一大中心としての圍爐裏といふものが若し無かつたならば、到底今見るやうな家庭及び社會は出來上らなかつたらう。民の竈といひ、若しくは、戸數を何十何煙といつて數へたのも、實は一家の内に火を焚く場所が、たゞ一つしか無かつたことを意味するのである。

其の火の管理者を、日本では「あるじ」と名づけ、後には旦那殿とも稱した。さうして、其の管理權の所在を具體化したものが、爐の横座であつた。横座とはいつても、それは正面の席で

あつて、事實は其の左右の敷物が何れも縱に連なつてゐるのに對して、家長の座だけは横疊に敷いてある故に、さういふ名前が古くから生じてゐたのである。

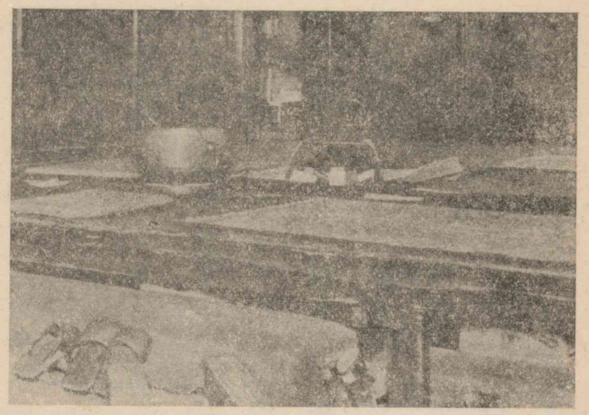


圖　爐　裏

通例は、向かつて爐の右手、卽ち横座から左になる一側を、茶飲座、腰元又は勝手などとも呼んでゐる。其の最も横座に接近した席は、當然に主婦に專屬した。「へら」卽ち飯匙は其の權力の象徵であり、食物の分配はたゞ「へら取」卽ち「おかた殿」のみの掌る所であつた。

茶飲座と相對する他の一側が客座である。こゝにも席次があつて最も款待せらるべき者が、一番横座の右近くに坐つた。それから、殘りの今一側の爐端が、下座、下郎座又は木尻である。「嫁は木尻筋から貰へ」といふ諺などもあつて、一段と身分の低いものの座席である。本來は薪の尻を其の方へ向けて置く故の名であつた。煙いのを我慢すべき、居心地のよくない座であつた。

さてこれほどまでに秩序を正して、家には一つしか火の中心を作らぬやうに努めたのであるが、人の心の變化は是非無いもので、終に室毎に炬燵を置かねばならぬ時代が來た。最初は年寄などの安住處としたものが、後には息子までが新聞

や本を抱へて、自ら獨立を宣するやうになつた。それを後援したのは紙と硝子の障子、次にはランプ・電氣燈などであつた。

此の炬燵は火の神の信仰に對して、明白に一つの叛逆であつた。正月松の内に圍爐裏に足を入れると、苗代に鷺が附くなどといつて叱られてゐたのに、炬燵では何の遠慮も無く、足を出してあたつてゐる。しかし、猶知らぬ間に以前からの約束を蹈襲して、火の清濁の差別待遇を承認し、此の火は食物の煮燒きなどには供用せぬことになつてゐた。炬燵の中で手を叩くことを、老人などの非常にいやがる土地が今でもあつて、それを何故かと尋ねて見ても、もう説明し得る者は一人も無いのであるが、手を叩くといふのは恐らく荒神樣の禮拜を意味し、火の淨からぬ炬燵の中では、其の行爲をさへ嚴戒してゐたのではないかと思ふ。

火を焚けば話がはずむといふ原因結果は、よほど久しい大昔からの、不思議なる法則であつたらしい。前年和蘭のローレンス博士の一行が、二度目のニューギニー雪山の探檢を企てた時には、色々考へた末に、ボルネオ内地の土人を人夫に連れて行つた。勇敢で、從順で、正直なことは申分無かつたが、ただ一つの缺點は、夜營地で焚火をさせると、火のある間は話をしてゐて、どうしても睡らないから、日中に居眠をして困ることであつた。赤道直下の島に生まれた彼等には、通例は火の必要は無い筈であるが、一たび高山に登つて榾火の夜の光に接すると、忽ちにして悠遠なる祖先の感覺が目ざめるのか、特

ニューギニー　大洋洲に屬する太平洋諸島中の大島
ボルネオ　マレー群島中の大島

殊の興奮に誘はれずにはゐなかつたのである。

日本に於ても、昔話は多のものであり、且夜分にするものときまつてゐたのは、本來は必ず圍爐裏に火を燃す時の儀式であつた爲かと思ふ。即ち、横座の主は、家の火の管理者であると同時に、更に先天的に夜話の議長であり、且傳統教育の學校長でもあつたかと思ふのである。そして、此の傳統教育は、今日の人の思ふよりはるかに有力な人間教育であつたらうとも思はれるのである。

（雪國の春）

四　松下村塾

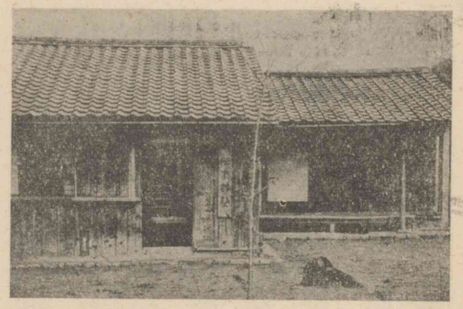
徳富蘇峰

徳富蘇峰
名は猪一郎
著述家
帝國學士院會員　帝國藝術院會員
熊本縣の人
文久三年（一八六三）生
松下村塾
現山口縣萩市椿東に在つた
松陰
吉田松陰
名は矩方
通稱寅次郎
幕末の先覺者
長門國（山口縣）萩藩士
安政六年（一八五九）歿
年三十
下田
現靜岡縣賀茂郡下田町
三島
現同縣三島市

松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり。渡海の策敗れて下田の獄に繫がるゝや、獄吏に說くに、自國を尊び、外國を卑しみ、綱常を重んじ、彝倫を敍づべきを以てし、獄卒の眼に涙あらしめたり。下田より檻輿江戸に赴き、途三島を經るや、警護の匹夫に向かひて大義を說き、彼等をして憤勵の氣、色に見れしめたり。其の獄にあるや、感化は同囚者に及び、獄卒に及び、遂に司獄者までも彼が門人となるに至れり。彼の在る所、四圍彼の如き人を生ず。是何によりて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。而して、彼が最も其の鼓吹者たり感激者たる特質を現したるは、松下村塾に於て之を見る。

赤間關の砲臺　毛利藩が赤間關（現下關市）に築いた砲臺　文久三年四箇國聯合艦隊と戰つた
奇兵隊　文久三年萩藩士高杉晉作等が組織した義勇隊
伊藤博文　政治家　初代內閣總理大臣　公爵
舊萩藩士　明治四十二年歿　年六十九
安政二年　二五一五年　孝明天皇の御代
野山の獄　現萩市南古萩町に在つた萩藩の獄

松下村塾は幕府顚覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維新の天火を燃やしたる聖壇の一なり。笑ふ勿れ、其の火、燐よりも微かに、其の卵、豆よりも小なりしと。赤間關の砲臺は粉にすべし、奇兵隊の名は滅すべし、然れども松下村塾に至りては、獨り當時に於て結果の偉大なるものありしのみならず、流風遺韻、今に及んで猶人をして欽仰歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり。


松下村塾

彼が門下の一人なる伊藤博文は言はずや「如今廟廊棟梁、器多是松門受教人」と。

彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて家に蟄居せしめられたり。而して後には、蟄居中家學を授くるの許しをも得たり。松下村塾の名は、其の內叔玉木・外叔久保等が相繼いで用ゐたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人が所謂松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。蓋し、松陰が松下村塾に直接の關係を有したるは、安政三年の秋より安政五年の暮までにして、其の歲月は僅かに二箇年半に過ぎず。しかも此の二箇年半の歲月が、其の後の日本歷史に於ける千波萬濤の激起點となりたるなり。

玉木　玉木正韞　通稱文之進
舊萩藩士　明治九年歿　年六十七
久保　久保久成　通稱五郎右衞門
舊萩藩士　文久元年歿　年五十八

彼は未だ僅かに二十七歲、要するに是、白面の一中書生のみ。而して彼がよく其の力よりも大なる感化を及し、彼が人物と匹敵する、否、或點に於ては寧ろ彼よりも優れたる弟子を出し得たるは何ぞ。「感在知己」の一句、これを說明して餘りあるべ

士規七則
松陰が安政二年野山獄中で草した七箇條の教訓

死而後已四字、言簡義該。

堅忍果決、確乎不可拔者、舍是無術也。（士規七則）

し。

彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸著すれば、轟然として火星を飛ばす。此の時に於ては、物も碎け、彼も亦碎く。彼の全體は燃質にて組織せられたり、火氣に接すれば乍ち焰となる。其の焰となるや、鐵も鎔かすなり、金も鎔かすなり、石も鎔かすなり、瓦も鎔かすなり。彼の人に接するや、全心を擧げてす。彼の人を愛するや、全力を以てす。彼は往々インスピレーションの爲に精神的高潮に達す。而してこれを以て他に接し、他を導いて此の高潮に達せしむ。知るべし、彼が教育の道他なし、唯己が眞骨頭大本領を據べて以て之を他に及すのみなるを。

彼が金誠たる士規七則に就いて見るに、質實義勇、斃れて已

むの眞骨頭を以て尊皇攘夷の大本領を發揮したるもの、彼、是を以て自ら感激し、彼、是を以て自ら鼓舞す。其の一呼、虎嘯き、一吸、龍躍るもの、亦故なしとせず。

吉田松陰筆士規七則

怪しむ勿れ、彼が師を以て自ら居らざるを。彼の眼中、師弟なくして唯朋友あるのみ。是、一は彼が年齒猶壯なるが爲、一は學校といはんよりも同志者の結合といふに近きが爲なるべしと雖も、又彼が天性然るべきものあり。顧ふに、其の弟子

が、彼が骨冷やかなる後に至るまで、猶涕を垂れて松陰先生を說くもの、豈故なしとせんや。

既に義勇節概の眞骨頭たり、攘夷尊皇の活題目たるを知らば、松下村塾の所謂教育なるものも亦知るべきのみ。教育とは何ぞ、東坡の留侯論中の語を假り來れば、「其意不レ在レ書ニ」の一句にて足るべし。彼等が學問は、書物の上の學問に非ずして實際の上の學問なり。眼前の活事實を材料としたる學問なり。其の熱心に考究せしは、「米國より和親を申込めり、これは如何に爲すべきか」「攘夷の大詔渙發せり、之を奉戴して運動するには、如何なる事を爲すべきか」といふが如き類にして、學校たるや改革運動の本部たるや區別なく、學問たるや運動の評議たるや境界なく、學問卽ち事業、事業卽ち學問にして、坐して言ふ

東坡　蘇東坡　名は軾　支那宋代の文豪　皇紀一七六一年歿
留侯論　漢の高祖の功臣張良を評した論　唐宋八大家文讀本所撰

べく、起ちて行ふべく、行うて敗るゝも、苟も大義に合せば、更に意とする所なしといふにあり。然れば彼等の學問は他日の用意に非ず。今日學ぶ所は卽ち今日の事にして、今日行ふを得べく、また行はざるべからざるの責任を有す。之を譬へば、なほ劍道の師範が道場を戰陣の眞中に開くが如く、其の勝負は所謂眞劍の勝負にして、勝つ者は活き、負くる者は死せんのみ。其の及第、其の落第、總べて活事實の上に存す。

彼等は如何にして此の活學問を講じたるか。彼が久坂玄瑞に與へたる書中に曰ふ、

隔日、左傳・八家會讀、勿論塾中常居七つ過ぎ會讀終る。夫より畠又は米春き、在塾生と之を同じくす。米春き大いに其の妙を得、大抵兩三人、同じく上り、會讀しながら之を

久坂玄瑞　名は通武　通稱義助　幕末の勤皇家　松陰の高弟　萩藩士　元治元年（一八六四）歿　年二十五
左傳　春秋左氏傳　三十卷　春秋の註釋書　魯の左丘明編
八家　唐宋八大家文讀本　三十卷　唐・宋兩代の八文豪の文集　淸の沈德潛編

春く。史記など二十四五葉讀む間に米精げ畢る、亦一快なり。

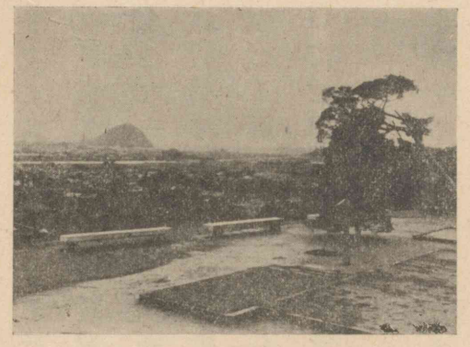
と。米を舂きながら會讀する先生あれば、糠を篩ひながら講義を聞く生徒もあるべし。彼が他日再び野山の獄に投ぜられたる時に於て、福原又四郎に書き與へ、尊皇攘夷の事を論じ、諸友の因循なるを尤む。曰く、「彼等或は又背き去ると雖も、蓋し村塾爐を圍み、徹宵の談を忘れざるべし」と。嗟呼、寒爐火盡きて灰冷やかなる處、霜雁月に叫んで人靜かなる時、三五の青年相團欒し、灰に畫がきて天下の經綸を講じ、東方の白むを知らざりしが如き、五十年後の今日に於て、猶人をして永懷堪ふべからざらしむ。況や時勢迫り、人物起ち、天下動かんとする當時に於てをや。

史記 百三十卷 黃帝から漢武帝に至る史書 漢の司馬遷著

福原又四郎 名は利貞 松陰の門人 萩藩士

五十年後の今日 明治二十六年

彼は社會の寵孫にあらず、彼が子弟も亦然り。彼等は恰も雪を踏んでアルプス嶺を攀づる旅客の如し。其の隆凍苦寒を凌がんが爲には、互に負戴し抱擁し、自他の體溫によりて其の呼吸を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に斃れて弟子後に奮ふ。彼は知己の感を以て其の子弟を陶冶せり、激勵せり。彼は活ける模範となり、子弟に先立ちて難に殉ぜり。否、子弟の爲に難に殉ぜり。此の時に於て、懦夫と雖も猶起つべし、況や平生の素養あるものに於てをや。況や恩愛の情、知己の感ある



松陰誕生地

アルプス ヨーロッパの西南部に横たはる大山脈

ものに於てをや。彼は其の子弟に向かつて我が如く做せといへり。而して做せり。彼等豈徒然として止まんや。

其の時を以てすれば、二年半に滿たず。其の處を以てすれば、萩城の東郊なる矮屋に過ぎず。而して洪太尉が伏魔殿を發きて一百八の妖星を走らしめたる如く、唯此の中より無數の活劇及び活劇を演ぜし大立者を出したる所以のもの、豈其の由る所なくして然らんや。世或は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。個人の社會に及す勢力も亦輕視すべからざるものありといふべし。

（吉田松陰）

萩城　現萩市の西北に在つた
洪太尉が云々　支那の長編小說水滸傳の發端

五　天寵

森鷗外

森鷗外　名は林太郎　小說家　劇作家　文學博士　醫學博士　陸軍軍醫總監　帝室博物館總長兼圖書頭　島根縣の人　大正十一年歿　年六十一

M君は、「去年お話をしたかも知れませんが」と云つて、口を切つた。話の概略はかうである。

M君が去年ひど算段をして畫をかいて、某展覽會に出した時、君の父親は故郷で大病になつてゐた。入選したといふ吉報を、父に、息のあるうちに聞かせたいのが、君の切な願であつた。これは單に父を喜ばせたいと云ふだけではなかつた。畫かきになるのを、世の廢れものになるやうに思つて、強ひて思ひ止らせようとした父に、君はこれによつて、自分が空虛な希望を懷いてゐたのではなかつたと云ふ分疏をしようとしたのであつた。

千駄木町
現東京市本郷區駒込千駄木町
千駄木林町
現駒込林町

父は亡くなつた。故郷で家を繼いだ兄は、纔かに一家の生計を營んでゐるだけで、M君の學資を出すことは出來ない。M君は今までのやうに學校に籍を置いてゐるには、自力で生活費と學資とを得なくてはならぬことになつた。

森鷗外

M君はTと云ふ文房具屋へ往つて、小僧になりたいと申し込んだ。學資を拂つて貰つて、午前は學校に往き、午後は小僧として働かうと云ふのである。Tは主に洋畫の顏料や、畫布や、畫筆を商ふ人で、私の住んでゐる千駄木町の北、千駄木林町に工場を

持つてゐるが、この我が儘な、小僧らしくないM君の注文を聽き納れて、君の學資を出し、君を三疊の部屋に置いて、午前は學校に通はせた。

M君は暫く小僧生活を經驗した。そしてその間に豫想しなかつた故障を見出した。それは、午後に小僧になつて勞働する自己と、午前に畫かきになつて修行する自己とを、かつきりと分割することが出來ぬと云ふ事實である。學校でデッサンをするのに、どうも今までのやうな氣分になれない。昨日の小僧が出て來て、今日の畫かきの邪魔をする。

そこでM君はいろ〳〵に考へて見た末に、主人Tにかう云ふ相談をした。自分は一旦誓つた事を必ず履行しようと思つたが、どうもそれが出來なくなつた。前日の小僧生活が翌

日の晝の邪魔になる。然るに晝はやめることが出來ぬから、小僧をやめるより外ない。さて小僧をやめて、どうして學資と生活費とを得ようかと云ふに、自分の考へた所では、只一つの方法しか無い。それはこの儘こちらに置いて貰つて、こちらの商品を學校の先生や生徒仲間に賣り捌くのである。毎日學校へ往つて稽古をして、かたはら顏料などの注文を聞く。そして注文せられた品々を、次の日に學校へ持つて往く。それが、今まで小僧をしたと同じ程、こちらの役に立つかどうか知らぬが、とにかくそれだけの仕事をする報酬として、今まで通りこちらで世話になりたいと云ふのである。

M君はTが腹を立てはせぬかと氣遣ひつゝ此の話をした。然るに意外にもTの顏には、大人が子供の話を聞く時の微笑

のやうな微笑が現れた。そしてTは云つた。「さうですか、私も一旦あなたの身の上を引受けたものですから、お望通りにして上げませう。これまでも、あなたの方では小僧として一廉の骨折をしてゐた積りでせうが、實は內の坊主ほどの役にも立つてはゐません。それですから、商品の賣捌は旨く行つても行かなくても、私の方の損得には、格別これまでと違つた事も無いのです。若し又旨く賣捌が出來たら、收入の五分位はあなたに上げるから、あなたの方にも得が行くわけです」と云つた。內の坊主と云ふのは、去年九歲であつたTの息子である。

Tはこの時又かう云つた。「あなたの正直な事は、私が一目見て見拔いた積りで、內へ入れたのです。それは私の見込違

ではなかつた。併し私は別に見込違をした。それはあなたは畫の方が旨く行かないので、文房具商にならうと思つて這入り込んだのだ。人は正直だが、その腹だけは隱してゐて、こつちの樣子がわかつた上で、私に腹を打明けようと云ふのだらうと、かう思つたのです。所が、今になつて見れば、あなたは飽くまで畫かきにならうとしてゐなさるやうだ。私は遠慮無しに言ふから、おこつてはいけませんよ。一體あなたは畫で成功すると云ふ見込が立つてゐるのですか。先生方はなんと云つてゐますか」と云つた。

M君は有りの儘に、先生方の意見は改めて聞いて見たこともないが、自分だけは成功する積りだと答へた。

Tはこの答に滿足しないで、かう云つた。「自分でばかりさ

う極めてゐたつていけません。第一あなたが苦しい思をして、無駄骨を折つてはならない。それに私だつて世話をして上げるからには、世話甲斐が無くてはつまらない。どなたにでも好いから、不斷あなたの仕事を見てゐる先生に、末の見込がありさうかどうか、聞いて御覽なさい」と云つた。

M君は、「さう云ふわけなら、近いうちにW先生に聞いてみませう」と約束した。そして小僧と云ふ副業から、行商人と云ふ副業に轉じた。

M君は、學校で先生や生徒仲間の注文を聞いて、翌日その品を持つて行く事になつた。暫くたつと、M君は行商人が決して小僧より樂でないことを知つた。片手に自分の學校道具を持つて、片手に注文の品を持つのだが、その品が時々嵩張る

ことがある。顔料や畫筆なら幾ら持つても知れたものだが、畫布は枠に張つて來て貰ひたいと云ふ人があるので、その張つたのを二枚持つて行く日には、寒い日にも汗を出して、途中で何遍も休まなくてはならない。その上T方で品物を取揃へたり、枠張りをしたりすると、折角やめた小僧生活が幾分か再現することになる。新しい副業から生ずる、この室内、途上の勞働は、殆ど初の小僧生活と同じ程の惡影響を、學校にゐる時の氣分に及すのである。

それと同時に、M君は内部から一種の壓迫を受けて來た。それは強烈な制作欲が發して、次第に高まつて來たのである。學校でしてゐるデッサンは、見廻りに來た先生に「さう、君、奇拔にばかりやらうと思つてはいかん」と云はれるが、君自身は殆

ど機械的にしてゐる積りである。これではすこしも制作欲を滿足せしめることは出來ない。そこで、内に歸つてゐる間に畫がかきたい。「頭が一ぱいになつてゐる」のを外へ出したい。然るに、行商人としての日々の仕事に時間を取られる。またTの貸してくれた三疊の間には、夜具や机を持ちこんでゐるので、畫をかく場所も無い。それから、Tには學資を出して食はせて貰つてゐるだけであるから、現金と云ふものは行商の賣上金から五分の配當を受けるより外には無く、それも一箇月に精々二圓位のものなので、畫布や顔料を買ふことが出來ない。

こんな風に、M君は外からは行商生活に苦しめられ、内からは制作欲に惱まされてゐるので、Tには約束して置きながら、

麻布霞町
東京市麻布區
霞町

久しくW先生を訪問することが出來なかつた。W先生は自分のカリカチュアを山賊のやうにかく、こはい顔の人であるが、生徒に優しくしてくれるので、君は自己を鑑賞して貰ふことをこの人に賴まうとしたのである。そのうちTが、「どうです、先生の所へ往つて見ましたか」と催促することが二三度に及んだ。君もこの上捨てても置かれなくなつて、或日ふらふらとT方を出て、麻布霞町のW先生のアトリエに往つた。

M君がこの家の閾を跨ぐのは二度目であつた。戸を開けて這入つて見ると、先生は畫架の前に立つて畫をかいてゐた。M君を一目見て「一寸待つてくれ給へよ」と云つて、その儘かいてゐる。君は暫く傍で見てゐる。こんなにして畫をかくことが出來たら、どんなに愉快だらうと思ふと、君の胸は跳る。

W先生は筆を停めた。そして筆とパレットとを無造作に置いて、身を椅子の上に投げた。「さあ、君も掛け給へ。待たせて濟みませんでした。何か用事ですか。この頃はどうしてゐます。」

「實は先生に伺ひたい事がありまして。伺つたところで、どうにもならないのですが。實は。」M君の詞はしどろもどろであつた。この時W先生の顔には微笑が浮かんで、その口からは、物馴れた醫者が病人の容體を問ふ時のやうな、いたはりつゝ探り究める種々の問が發せられた。君はそれに答へてゐるうちに、心に思つてゐるだけの事を殘らず打明けてしまつた。

W先生は聞いてしまつて、かう云つた。「そんなら先づ君の

用事から片附けて行くとしようね。Tには、かう云つてやり給へ。Wの云ふには、私の前途は決して平坦な道ではないが、躓かずに進んだら、面白い境界に達するだらうと云ふことだとね。それは好いが、君の現狀には困つたね。それを脫するには金がいる。さあ、私にも格別の名案は無いね。これは今君の話を聞いてゐるうちに、ふと思ひ出したのだが、ヨーロッパの畫かきの所へは、よく商人が顏料や畫筆を澤山持つて往つて預けて置く。それを畫かきは入用な時幾らでも使ふ。商人は時々往つて、どれだけ使つたかを見て勘定をする。あれを、Tに相談してやつて見てはどうだらう。私にも差當りその位の智慧しか出ないね。それから、私が君に補助をしてあげても好いが、大した事は出來ない。毎月五圓出してあげよう。併し只貰ふのは不愉快だらうから、君に賴むことがある。私の所へ或植木屋から、期日をきめて薔薇を送ることになつてゐる。君はその植木屋に話して、それを私の所へ運搬することにしてくれ給へ。たまの事だから、勞力も時間の損失も格別無い筈だ。さうして貰へば、私はその報酬として、君に五圓あげるからね。」

M君はこの話を聞いて、素直に承諾した。そしてW先生に簡單な禮を言つてアトリエを出た。戶の外に出ると、M君は深い息をして、心の內で「畫がかける」と叫んだ。電車の中では、早く畫室になるやうな明二階か何かを搜して見たくてならなかつた。

T方に歸つて、M君は主人に先づW先生の豫言を言つて聞

かせた。「はあ、なか〳〵あなたを買つてゐますね」と云つたTの顔には、君の目で見ると、どうも反對の、全く消極的な宣告を受けて來るものと豫期してゐたらしい表情が見えた。それから畫かきの所に材料を預けて置かうと云ふ相談をした。主人は「さうですな」と云つて、煙草をのみつゝ考へてゐたが、煙草の吸殼をはたいて、「どうもそいつはいけませんな」と言ひ放つた。商品をどれだけ買ひ込んで置く。その内どれだけはけて行く。そのはけて行くだけを買ひ足す。かうして均衡を失はぬやうにと骨を折つてゐるのに、所々方々に商品を置き放しにして、謂はば寢かして置くわけにはいかない。西洋ではそんな事が出來るか知らぬが、日本ではそれの出來る商人はあるまいと云ふのであつた。

M君は主人の話を聞いて、別段落膽もしなかつた。それは心の内に、「畫がかける」「畫だけはかける」といふ叫が、絶え間無く響いてゐて、自分の内生活が今までゐた灰色の霧の中から、薔薇色の霞の中へ移されたやうな感じがしてゐるからである。よし今まで通りの行商をして行かなくてはならぬとしても、君は今ならその煩勞に堪へることが出來ようと思ふ。「畫がかける」といふ叫は、君にあらゆる苦艱に對する免疫性を與へる。君を不仁身にする。

次の日學校から歸るとすぐに、M君は貸間を捜しに出た。十軒ばかりも見たあげくに、或裏町で、とう〳〵明りの工合の好い二階を、一箇月三圓で借りることが出來た。

そこへ道具を持ち運んで、大抵の物はT方の廢物を利用し

て濟ますやうに工夫して、間に合はせのアトリエを完成するのが、M君の爲には、殆ど畫をかくと同じやうな悅であつた。たゞ畫がかけさへすればよいといふ原則の下に、君は總べて金のかゝる設備を省かうとした。

M君はまだ設備の出來上らぬうちに植木屋に往つた。植木屋では、丁度薔薇を送る期日になつてゐるといふので、溫室で咲かせた薔薇を一籠わたした。それを持つて往つて、W先生から五圓の金を受取つた。その中から一箇月分の間代を差引いた二圓は、君の畫室の爲には、天を補ふ五色の石程の用にたつた。

畫室の設備が出來上つた所で、M君はモデルを傭ふ金に窮した。君はどうしても人物がかきたい。それにはモデルが

天を補ふ云々
女媧鍊二五色一、以補二蒼天一（淮南子）

無くてはならぬのである。

M君の持つてゐる物の中で最も價の貴いのは、去年某展覽會に出して落選した、大きい油畫の額緣である。君はTに賴んで、それを二十圓に買つて貰つて、モデルを傭ふ資金にした。君の爲には、これが最後の手段で、この二十圓を使つてしまふと、君は再び去年の畫が落選した後のやうな、かきたい畫のかかれぬ境遇に戻るのである。かくしてM君は、毎日日沒前の二時間を畫室で暮すことになつた。

この話をしてしまつて、M君は二枚の油畫を私に見せた。二枚とも去年のやうな模糊たる人物では無い。「なぜこんな風なのを去年出さなかつたのです」と、私は尋ねた。

「でも、あの時一番かきたかつたものをかいたのだから、仕方がありません」と、君は答へた。

それから私はM君にこんな事を言つた。「君の近業を見せて貰つたのは有難い。併し君の經歷談を聞かせて貰つたのは、それに劣らぬ有難い事である。君は自分の境遇をひどく不幸だと思つてゐるか知らぬが、一轉して考へて見れば、君のやうな運命の寵兒は珍しい。君は、Tのやうな商人が、今の世の中に又とあらうと思つてゐるか。又W先生のやうな師匠が又とあらうと思つてゐるか。君はどう思ふ」と、私は云つた。

M君は自分の境遇が意外な照明を受けたのに驚いたらしく、「なる程、さうでせうかね」と云つて目をみはつた。

（鷗外全集）

佐藤春夫
詩人　小説家
和歌山縣の人
明治二十五年生
うた日記
明治三十七八年戰役從軍中に成つた日記體の詩歌集
明治四十年刊

沙河會戰
明治三十七年十月沙河（現滿洲國奉天省內、奉天の南方に在る）附近に於て日本軍がロシヤ軍を破つた戰
十里河
現奉天省內、沙河の南方に在る

六　機

佐藤春夫

森鷗外の「うた日記」中に「石田治作」といふ詩がある。石田治作は感狀を受けた下士卒が司令部附になることとなつた時、軍醫部長の從卒としてまはされた者であつた。詩は鷗外と新從卒との對話によつて出來てゐる。

先づ、鷗外は石田をして彼が感狀を受けた由來を語らせる。石田は沙河會戰中、十月十二日午前十一時、十里河の南方—右岸から攻擊して來た敵の砲兵陣地前七百メートルのところから、突擊の命によつて進んだ某大隊の左翼中隊の左翼分隊の一員であつた。彼が敵の陣地に接近した頃には、身方から離れて、身方の正面に銃丸を後から雨と浴びるやうな形にな

り、死は決してゐるのだから、同じ死ぬならば敵の陣地まで往つて死にたいものと、石田は眞先に進んで、三人の敵が陣地を捨てて逃げるのを認めた。外に殘つてゐた二人の敵のうち、一人は砲に霰彈を籠めてゐる最中、もう一人は馬をひきよせて左手をその取毛にかけ、今や馬に跨がつて逃げようといふところ。石田は、先づ、彈を籠めてゐた一人を銃丸で殺し、その銃を取り直して、馬で逃げようとしてゐる者の方へ銃劍をつきつけ、劍尖が偏足を鐙にかけてゐた將校の外套に觸れるばかりになつた時、かの將校は身を飜して拳銃を右手に持ち、進まんとする石田の胸に擬した。石田は、全身の力を銃を握る兩手に籠めて用意をした。この刹那、敵の將校は何と思つたか、拳銃を握つてゐた右手をも項をも垂れたので石田も躊躇

してゐると、將校は拳銃を投げ捨てて石田の右手を確と握つた。かくて、石田の擒にしたのは砲兵の大尉で、石田の銃に打たれて死んだのは少尉であつた。遺された四門の砲は、我が中隊の捕獲品となつた。

これが、自ら語る石田治作の手柄である。詩はまだつゞいて、眼目は後の方にあるのだが、今までのところだけでも、複雜な緊張し切つた活動的な光景をまるで爲方話よりもあざやかにくつきりした形に見せて、その刻々に動く動作と力とをさへ見せてゐる筆力は及ぶべくもないもので、熟讀し凝視するほど味を加へる。散文になほしてみた拙文などでは到底その一端をも表現し得てゐないから、無念ながら彼の砲兵大尉の如く、筆者も禿筆を投げ出してしまつて、全篇をこゝに引

用する外はない

感狀を　受けし下士卒　一
司令部に　つけられし時
靜岡の　石田治作は
わが許に　從者(ずさ)として來ぬ
戰の　さまを問へども　五
すなほなる　性にしあれば
はなじろみ　容易く言はず
強ひられて　やうやく開く
つくろはぬ　口より出でし
飾なき　ことばに曰く　一〇
十月の　沙河會戰の

十二日　午前十一時
十里河の　右岸より擊つ
砲兵の　陣地に向かひ
責め寄せし　我が大隊の　一五
辿り來し　凹地を出でて
南邊(みなみへ)の　岸に近づき
陣地前　七百めえとる
擊つ砲を　認め得し比
突擊の　命は下りぬ　二〇
幸ありて　わが屬せりし
大隊の　左翼中隊
中隊の　左翼分隊

いちはやく　河を渡りて
めざしたる　陣地まぢかく　二五
寄るほどに　味方と離り
正面の　我が銃丸は
うしろより　雨とふりきぬ
かねてより　死をば決しつ
陣地まで　往きて死なんと　三〇
眞先に　わが進むとき
敵みたり　逃るる見えぬ
殘りにし　ひとりは砲に
霰彈を　今ぞ籠めたる
又ひとり　馬ひきよせて　三五

ゆん手をば　取毛にかけつ
わが放つ　銃に中りて
丸こめし　ひとり僵れぬ
わが持たる　銃劒の尖
偏足を　鐙にかけし　四〇
將校の　外套にこそ
あやふくも　觸れんとしたれ
將校は　身を飜し
拳銃を　めてにとりもち
進むわが　胸に擬したり　四五
銃握る　わがもろ手には
身のうちの　力籠れり

此の刹那　何思ひけん
將校の　拳銃とれる
右手垂れて　項も垂れぬ　五〇
おもほえず　われためらへば
將校は　拳銃すてて
わが右手を　しかと握りぬ
かくてわが　擒にせしは
砲兵の　大尉とぞいふ　五五
霰彈を　籠めてえ撃たず
討たれしは　少尉と知りぬ
遺されし　四門の砲は
中隊の　えものとなりぬ

我が敵は　撃つべき手中の　六〇
拳銃を　など撃たずして
棄てけんと　治作語りぬ
聽け治作　そのよし告げん
かねてより　死を決したる
汝こそ　撃たせて刺さめ　六五
生くる道　求むる敵の
刺されつつ　いかでか撃たん
一すぢの　髪だに容れぬ
勝敗の　機はここにあり
おしなべて　軍もしかなり　七〇
國もしかなり

ぼんやりした頭では作ることは愚か、讀むことさへ出來ない。しかし、決して混濁して晦澁なのではない。文の構成が複雜なのである。

説明の便宜上五行づつに分けて置いた。最初の二十行位までは一讀してわかる通りである。たゞ「十月」「十二日」「午前十一時」「沙河會戰」などの報告的な文字が面白く用ゐられてゐるのを見るだけである。これは二〇—二五の間の「大隊」「中隊」「分隊」「左翼」などの用法と照應してゐる。手法全體も、同樣な機械的な手法によつてゐる。「幸ありて　我が屬せりし」などもその一例だが、更に、左翼中隊の左翼分隊がいち早く河を渡つて、目ざした陣地まぢかく寄る程に、——著しく前進したために、身方の正面の銃丸が雨とふり來るといふ句法は、飽くまで理

智的なものである。更に、三〇—三五の間では、先づ、敵が三人逃げて、あとに、ひとりは砲に霰彈を籠め、ひとりは馬をひきよせてゐると、逃げた三人の外の二人はひとりづつ別に述べて、しかも、ひとりづつは片づけてしまはず、ひとりが砲に彈を籠めてゐる間にひとりは馬をひきよせて取毛に手をかけてゐるといひ、わが放つ銃に中つて彈籠めしひとりが僵れてしまつて後、わがもたる銃劍の尖が「偏足を鐙にかけし將校」の外套に觸れんとするといふ。あつちにもひとり、こつちにもひとり、或は彈を籠めてゐたり、或は馬の取毛に手をかけてゐたり、或は僵れたり、或は偏足を鐙にかけたり、敵が一體幾人ゐるのかと疑はれさうだが、結局ふたりなのである。彈を籠めてゐたひとりとわが銃に中つて僵れたひとりとは同一人で、馬の

取毛に手をかけてゐたひとりと次ぎに偏足を鐙にかけてゐるのとは同一人で、取毛に手をかけてゐたのが次の瞬間にはもう偏足を鐙にかけてゐただけで、この一瞬々々を別々に述べてゐるのは正にフィルムの一こま〳〵を見ると同じ道理で、ひとりが討たれてゐる間に、馬をひきよせてゐたひとりは、逃げ支度を一層進めてゐた活動が言外に現されてゐるわけである。同様に、石田の活躍にしても、わが放つ銃に中つてひとりが僵れたと讀みも終らぬうちに、わが持たる銃劍の尖がもう「偏足を鐙にかけし將校の外套にあやふく觸れようとしてゐる。一梃の銃が二梃のやうに使はれてゐるのは、早い活動の表現なのである。これ等の句法があるからこそ、身を飜して拳銃を右手に取り持つたり、それを胸に擬してゐたのを

投げ捨てて相手の右手を確と握つたりする動作も、垂れた右手や項も活躍したものとして眼前に映じて來る。故意に、一度敵の人數などで多少の混亂を感じさせて、それを理解する用意を讀者の頭に要求して置いて、その了解に應じて同じ筆法で活躍的な開展を示す一句々々をどこまでも理智的に得心づくでうなづかせて、うなづかない限りは話は運ばない形になつてゐる。鷗外はこのあたりの手法に於て、日本語に新しいニュアンスを與へることに成功してゐる。しかし、こんな方法とてもたゞの意地悪な一時の試みを物好きでやつてゐるのではなく、それには、無論それ相應の必要があるからである。といふのは、この作の主題たる「聽け治作　そのよし告げん」以下は理性にうつたへなければならないものだから、そ

の本題に入る前に理性の活動を豫め刺激して置いたわけで、これ等の微妙さは飽くまでも表現の有機的機構に因るものである。

思はぬ長談義になつたが、この詩の主題たる「聽け治作」以下の「かねてより　死を決したる　汝こそ　擊たせて刺さめ　生くる道　求むる敵の　刺されつつ　いかでか擊たん　一すぢの　髮だに容れぬ　勝敗の　機はここにあり　おしなべて　軍もしかなり　國もしかなり」とある、この凜乎たる氣魄を示した鷗外の教を、石田治作は何と聞いたかは知らないが、筆者は「軍もしかなり」「國もしかなり」の次に、更に一句「人もしかなり」が餘してあるのを感じて、この教こそ、鷗外がこの時、從卒石田の質問のために答へただけのものではなく、鷗外自身、

その平素から抱懷し實踐してゐた精神の片鱗のやうに思へる。さうして、全軍に向かつては道義的要素を力說し重大視した鷗外が、軍の、否、いつも個々の人間に對してはこの精神を要求してゐたのではないかと思ふ。ひとり人間に對してだけではなく乘馬に對してさへかうであつた。——

隱沼に　ふみこみし足　えもぬかで
草はむ駒を　にくみけるかな

と、この精神のだらけた乘馬に對するにくみを表現した一首の實感に充ちてゐることを見ても知ることが出來る。

（陣中の堅琴）

澤庵・宗彭　臨濟宗の僧　但馬國（兵庫縣）の人　正保二年（一三〇五）歿　年七十三

不動明王　不動尊・無動尊　大日如來の化身　五大明王の一

七　不動智

澤　庵・

不動智と申す事は、不動は動かずと申す文字にて候。智は智慧の智にて候。動かずと申し候うても、石か木かのやうに無性なる義理にてはなく候。向ふへも、左へも、右へも、十方八方へ心は動き度きやうに動きながら、其の行く所にしばらくも止らぬ心を不動智と申し候。

不動明王と申して、右の手に劍を握り、左の手に繩を取りて、齒を喰ひ出し、目を怒らせ、佛法を妨げん惡魔を降伏せんと突立ちて居られ候。姿もあの樣なるが、何處の世界にもかくれて居られ候にてはなく候。容をば、佛法守護の形につくり、體をば、この不動智を體として衆生に見せたるにて候。一向の

凡夫は、見て怖をなし、佛法に仇をなさじと思ひ、悟に近き人は、不動智を表したる所を悟りて一切の迷を晴し、不動智を明らめ得れば、我が身則ち不動明王なるほどに、此の心法をよく執行したる人は惡魔もなやまさぬぞと知らせん爲の不動明王にて候。然れば不動明王と申すも、人の一心の動かぬ所を申し候。我が心を動轉せぬことにて候。動轉せぬとは、物に心を止めぬことにて候。物に心を止むれば物に心をとられ候。物毎に止る心を動くと申し候。物を一目見ても、心を止めぬを不動と申し候。

澤庵自畫自讃

千手觀音
千手千眼觀世音・千眼千臂觀世音
六觀音の一

千手觀音には手が千御入り候。弓を持ちたるもあり、劍を持ちたる手もあり、樣々の御手候。若し弓を取る手に心が止らば、九百九十九の手は皆用に立ち申すまじく候。一所に心を止めぬにより、千の手が一つも用に立たぬはなく候。觀音として、身一つに千の手が何しにあるべく候。

不動明王像（明王院藏）

不動智神妙錄
一卷
禪と劍道との一如を說いた書

身に手が千ありても皆用に立つぞといふ事を人に示さんが爲に作りたる容にて候。たとへば一本の木に向かひて、其の中の赤き葉一つを見て居れば、殘りの葉は見えぬにて候。葉一つに目をかけずして、一本の木に何心もなく打向かひ候へば、數多の葉殘らず目に見え候。葉一つに心をとられ候はば殘りの葉は見えず、一つに心を止めねば百千の葉が皆見え申し候。これを得心したる人は、卽ち千手千眼の觀音にて候。

又石火の機と申す事の候。石をはたと打つやいなや光が出で、打つと其のまゝ出る火なれば、間も隙もなき事にて候。これも心の止るべき間のなき事を申し候。又早き事とばかり心得候へば惡しく候。心を物に止めまじきといふが詮にて候。早きにも心の止らぬ所を詮に申し候。心が止れば、我が心を人にとられ申し候。早くせんと思ひ設けて早くせば、思ひ設くる心に又心を奪はれ候。

（不動智神妙錄）

與謝蕪村
本姓谷口
俳人　畫家
攝津國（大阪府）の人
天明三年（一四四三）歿
年六十八

八雜煮

與謝蕪村

三椀の雜煮かふるや長者ぶり
靜かさに堪へて水澄む田螺かな
春の海終日のたり〳〵かな
牡丹散つて打かさなりぬ二三片
富士一つ埋み殘して若葉かな
夕風や水青鷺の脛をうつ
さみだれや大河を前に家二軒

石工の鑿冷したる清水かな
涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲
朝顏や一輪深き淵の色
白露や茨の刺にひとつづつ
山鳥の枝踏みかふる夜長かな
西吹けば東にたまる落葉かな
葱買ひて枯木の中を歸りけり
宿かさぬ火影や雪の家つゞき

良寛
俗名山本文孝
禪僧
歌人
越後國（新潟縣）の人
天保二年（一四九一）歿
年七十五

九　月の兎

良　寛

いそのかみ古りにし御代にありといふ、猿（ましら）と兎（をさぎ）と狐（きつね）とが友を結びて、あしたには野山にあそび、ゆふべには林にかへり、かくしつつ年のへぬれば、久方の天の帝のききまして、それがまことを知らむとて、翁となりてそがもとに、よろぼひ行きて申すらく、いましたぐひをことにして、同じ心に遊ぶてふ、まこと聞きしがごとならば、翁が飢をすくへと、杖を投げて息ひしに、やすきこととてやややありて、猿はうしろの林より、木の實拾ひて來りたり。　狐は前の川原より、魚をくはへて與へたり。　兎はあたりにとびとべど、何もものせでありければ、兎は

心異なりと、ののしりければ、はかなしや、兎はかりて申すらく、猿は柴を刈りて來よ、狐はこれを燒きてたべ。いふが如くになしければ、烟の中に身を投げて、知らぬ翁に與へけり。　翁はこれを見るよりも、心もしぬに、久方の天をあふぎてうち泣きて、土にたふりてややありて、胸うち叩き申すらく、いまし三人の友だちは、いづれ劣るとなけれども、兎はことにやさしとて、からを抱へて、久方の月の宮にぞはふりける。　今の世までも語りつぎ、月の兎といふことは、これがもとにてありけると、聞く我さへも、白たへの衣の袖はとほりて濡れぬ。

〔出所〕良寛全集

能因入道　俗名橘永愷　平安朝中期の歌人
伊豫守實綱　藤原實綱　彼の國　伊豫國　現愛媛縣
三島　三島大明神　現愛媛縣越智郡宮浦村に在る國幣大社大山祇神社　祭神大山祇神
貞觀の帝云々　唐の太宗の故事　貞觀二年京師旱、蝗蟲大起。…太宗曰、所ハ冀移災朕躬一…遂呑之。自是不二復爲一災。（貞觀政要）

一〇　藝能逸話

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて彼の國にくだりたりけるに、夏の初、日久しく照りて民のなげき淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり、試みによみて三島に奉るべきよしを、國司しきりにすゝめければ、

あまの川苗代水にせきくだせ天くだります神
ならば神

とよめるをみてぐらに書きて、神司して申し上げたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて大いなる雨降りて、枯れたる稻葉、おしなべて綠にかへりにけり。忽ちに天災をやはらぐること、唐の貞觀の帝の蝗をのめりける故事にも劣らざりけり。

白河の關　現福島縣西白河郡古關村に在つた
源義光　通稱新羅三郎　義家の弟　大治二年（一七八七）歿
豐原時元　樂人　保安四年（一七八三）歿
時秋　豐原時秋　時元の子　樂人
陸奥守義家朝臣　源義家　通稱八幡太郎　嘉承元年（一七六六）歿　年六十八　永保年中に云々　後三年の役義家が清原家衡・武衡等を討つた戰

能因はいたれるすきものにてありければ、

都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の關

とよめるを、都にありながら此の歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、色をくろく日にあたりなして後「陸奥國の方へ修行の次いでによみたり」とぞ披露し侍りける。

源義光は豐原時元が弟子なり。時秋いまだ幼かりける時、時元は失せにければ、大食調入調曲をば、時秋にはさづけず、義光には慥に教へたりけり。

陸奥守義家朝臣、永保年中に武衡・家衡等を攻めける時、義光

近江國鏡の宿　現滋賀縣蒲生郡鏡山村に在つた古驛

足柄の山　足柄峠　現靜岡・神奈川兩縣の界に在る

は京に候ひて、かの合戰の事を傳へ聞きけり。暇を申して下らんとしけるを、御ゆるしなかりければ、兵衞尉を辭し申して、陣に弦袋をかけて馳せ下りけり。近江國鏡の宿に著く日、花田の單狩衣に青袴著て、引入烏帽子したる男、おくれじと馳せ來るあり。あやしう思ひて見れば、豐原時秋なりけり。「あれはいかに、何しに來りたるぞ」と問ひければ、とかくの事はいはず、唯「御供仕るべし」とばかりぞいひける。義光「このたびの下向物さわがしき事侍りて馳せ下るなり。伴なひ給はんこと、もつとも本意なれども、此の度におきては然るべからず」と、頻りに止むるを聞かず、強ひて從ひ給ひけり。力及ばで、もろともに下りて、つひに足柄の山まで來にけり。

彼の山にて、義光馬をひかへていはく「止め申せども用ひ給はで、これまで伴なひ給へること、其の志淺からず。さりながら、此の山にはさだめて關もきびしくて、たやすく通すこともあらじ。義光は所職を辭し申して都を出でしより、命をなきものになして罷り向かへば、いかに關きびしくとも憚るまじ。かけ破つて罷り通るべし。それには其の用なし。速に是より歸り給へ」といふを、時秋なほ承引せず。又いふ事もなし。其の時義光、時秋が思ふ所を悟りて、閑所に打寄りて、馬よりおりぬ。人を遠くのけて、柴を切りはらひて楯二枚を敷き、一枚には我が身坐し、一枚には時秋をすゑけり。うつぼより一紙の文書を取り出して、時秋に見せけり。「父時元が自筆たる大食調入調曲の譜。又笙はありや」と時秋に問ひければ「候」とて、ふところより取り出したりける用意の程、先づいみじくぞ侍

豐原（ぶんのうけ）豐家　雅樂の名家

鳥羽僧正　覺猷　大僧正　天台座主　戲畫の名手と傳へられる　保延六年（一八〇〇）歿　年八十八

法勝寺　現京都市左京區岡崎に在つた天台宗の名刹

りける。其の時「これまで慕ひ來れる志、定めて此の料にてぞ侍らん」とて、乃ち入調曲を授けてけり。「義光はかゝる大事によりて下れば、身の安否知り難し。萬が一安穩ならば、都の見參を期すべし。貴殿は豐原數代の樂工、朝家要須の仁なり。我に志をおぼさば、速に歸洛して道を全うせらるべし」と再三いひければ、理に折れてぞ上りける。

信貴山緣起繪卷（傳鳥羽僧正筆）

鳥羽僧正は、近き世にはならびなき繪かきなり。法勝寺金堂の扉の繪書きたる人なり。いつ程

院　鳥羽上皇　第七十四代

古今著聞集　二十卷　鎌倉時代中期に成つた說話集　橘成季編

の事にか、供米の不法の事ありける時、繪に書かれける。辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹き上げたるが塵灰の如くに空にあがるを、大童子、法師原走り散りて、取りとゞめんとしたるを、さま〳〵に面白う筆をふるひて書かれたりけるを、誰かしたりけん、其の繪を院御覽じて、御入興ありけり。其の心を僧正に御たづねありければ「あまりに供米不法に候うて、實の物は入り候はで、糟糠のみ入りて輕く候故に、辻風に吹き上げられ候を、さりとてはとて、小法師原が取りとゞめんとし候がをかしう候を書きて候」と申されければ、比興の事なりとて、それより供米の沙汰きびしくなりて、不法の事なかりけり。

（古今著聞集）

翁　二宮尊德　通稱金次郎　農政家　相模國（神奈川縣）の人　安政三年（一五一六）歿　年七十

至誠神の如し　至誠之道、可二以前知一。……禍福將レ至、善必先知レ之、不善必先知レ之、故至誠如レ神。（中庸）

一一　人道

翁常に曰く、人界にゐて、家根の漏るを坐視し、道路の破損を傍觀し、橋の朽ちたるをも憂へざる者は、卽ち人道の罪人なり。

翁曰く、山芋掘は山芋の蔓を見て芋の善惡を知り、鰻釣は泥土の樣子を見て鰻の居る居らざるを知り、良農は草の色を見て土の肥瘠を知る。皆所謂「至誠神の如し」と云ふものにして、永年刻苦經驗して發明するものなり。技藝に此の事多し、侮るべからず。

翁曰く、我が道は至誠と實行のみ。故に鳥獸・蟲魚・草木にも

孔明　諸葛孔明　名は亮　支那三國時代の蜀漢の丞相

蘇張　蘇秦と張儀　蘇秦は東周、張儀は魏の人　共に支那戰國時代の論客

皆及すべし。況や人に於てをや。故に才智・辯舌を尊まず、才智・辯舌は、人には說くべしといへども、鳥獸・草木を說くべからず。鳥獸は心あり、或は欺くべしといへども、草木をば欺くべからず。

夫、我が道は至誠と實行となるが故に、米・麥・蔬菜・瓜・茄子にても、蘭・菊にても、皆之を繁榮せしむるなり。假令、智謀孔明を欺き、辯舌蘇張を欺くといへども、辯舌を振るつて草木を榮えしむることは出來ざるべし。故に才智・辯舌を尊まず、至誠と實行を尊ぶなり。古語に「至誠神の如し」と云ふといへども、至誠は卽ち神なりと云ふも不可なかるべきなり。凡そ世の中は、智あるも學あるも、至誠と實行とにあらざれば事は成らぬものと知るべし。

翁曰く、天理と人道との差別を能く辨別する人少し。夫、人身あれば欲あるは則ち天理なり。田畑に草の生ずるに同じ。堤は崩れ、堀は埋り、橋は朽つ、是、卽ち天理なり。人道は私欲を制するを道とし、田畑の草を去るを道とし、堤は築き立て、堀はさらひ、橋は掛け替ふるを以て道とす。此の如く、天理と人道とは格別のものにして、天理は萬古變ぜず、人道は一日怠れば忽ちに廢す。されば人道は勤むるを以て尊しとし、自然に任かするを尊ばず。

夫、人道の勤むべきは、己に克つの敎なり。己は私欲なり。私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは此の田畑に生ずる草を取り捨つるを云ふ。己に克つは我が心の田畑に生ずる

論語 四卷 經書 孔子の言行錄 四書の一 己に克ちて云々

顏淵問ヒ仁。子曰ク、克ヒ己ニ復レ禮、爲レ仁。

草を削り捨て、取り捨て、我が心の米・麥を繁茂さする勤なり。之を人道といふ。論語に「己に克ちて禮に復る」とあるは此の勤なり。

翁曰く、天道は自然なり。人道は天道に隨ふといへども、又人爲なり。人道を盡くして天道に任かすべし。人爲を忽にして天道を恨むること勿れ。

夫、庭前の落葉は天道なり。無心にして日々夜々に積る。之を拂はざるは人道に非ず。拂へども又落つ。之に心を煩はし、之に心を勞し、一葉落つれば箒を取りて立つが如き、是、塵芥の爲に役せらるゝなり。愚と云ふべし。木の葉の落つるは天道なり。人道を以て毎朝一度は拂ふべし。又落つとも

捨て置きて、無心の落葉に役せらるゝこと勿れ。又人道を忽にして積り次第にすること勿れ。

愚人といへども、惡人といへども、能く教ふべし。教へて聞かざるも、之に心を勞すること勿れ。聞かずとて捨つることなく、幾度も教ふべし。教へて用ひざるも憤ること勿れ。聞かずとて捨つるは不仁なり。用ひずとて憤るは不智なり。不仁・不智は德者の恐るゝ所なり。仁・智二つ心掛けて我が德を全うすべし。

翁曰く、夫、人道は、譬へば水車の如し。其の形、半分は水流に順ひ、半分は水流に逆らうて輪廻す。まるに水中に入れば廻らずして流るべし。又水を離るれば廻ることあるべからず。

佛家に所謂知識の如く、世を離れ、欲を捨てたるは、譬へば水車の水を離れたるが如し。又凡俗の、教義も聞かず、義務も知らず、私欲一偏に著するは、水車をまるに水中に沈めたるが如し。共に社會の用をなさず。

故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は、宜しき程に水中に入りて、半分は水に順ひ、半分は流水に逆らひて、運轉滯らざるにあり。人の道も其の如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆らうて艸を取り、欲に隨つて家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり。

（福住正兄編「二宮翁夜話」）

内村鑑三
宗教家
東京市の人
昭和五年歿
年七十

一二 勞働

内村鑑三

働け、働け、報酬を得る能はずと雖も働け。若し報酬を得る能はずば、働きて報酬を得るの權利を得よ、然らば報酬は終に與へらるべし。又、憚らずして報酬を要求し得るに至るべし。報酬の約束せらるゝまで待ちては、事は成らざるべし、報酬は得られざるべし。

報酬は勞働に伴なふものなり。其の、何時、何人に由つて與へらるゝかは、我等の關與する所にあらざるなり。

社會學者は言ふ、勞働は賃金を獲るための苦業なりと。宗教家もまた其の聲を受けて言ふ、勞働は心身の疲勞なり、休養

を以て之を償はざるべからずと。然れどもクリストは言ひ給ふ、勞働は手を以て神の眞理を實得することなり、直ちに神の宇宙に接することなり、神と共に働くことなり、故に至高・純美の快樂なりと。

人の信仰は勞働に關る彼の觀念を以て鑑識するを得べし。勞働を忌み、卑しみ、避くる者は不信者なり。之を好み、尊み、樂しむ者は信者なり。余輩は半生の實驗に由つて斯く斷言するを憚らず。

農夫・樵夫・職工、正直なる商人等に懷疑あるなし。懷疑は學生・僧侶・文人等の中にあり。即ち、手を以て直ちに天然物に接することなく、多く室内に安坐して、宇宙と人生とに關し沈思

默考を凝らす者の中にあり。

懷疑は思想の過食より來る腦髓の不消化症なり。故に之を癒すの方法は、疑問の解釋を供するにあらずして、是等憐むべき坐食者をして、手を以て働かしむるにあり。

余輩は、机に寄りかゝりて宗教問題に煩悶する所謂懷疑者なる者に對し、些少の同情をも有せず。

信仰は信仰に由つて維持する能はず、信仰は勞働に由つてのみ能く維持するを得べし。信仰は根にして、勞働は枝なり。前者は養汁を供し、後者は之を消化す。枝葉無くしては、養汁は腐敗して毒素を釀す。勞働なくしては、信仰は墮落して懷疑を生ず。信仰維持に必要なるものは、より多くの信仰にあらず、手と腦とを以てする勞働なり。

勞働なくしては、肉體は飢ゑ、靈魂は死す。勞働は肉體維持のためにのみ必要なるものにあらざるなり。

信仰は神のために自己を棄つることとなり。愛國は國のために自己を棄つることとなり。自己を棄つるの點に於ては、信仰・愛國其の揆を一にす。余輩は嘗て、神を信ずる者にして國を愛せざる者あるを見ず、又眞に國を愛する者にして神を信ぜざる者あるを知らず。人の愛國は其の信仰を以て知るを得べし。神の敵、國の賊は自己を中心とする者なり。

（内村鑑三全集）

一三 愛國者福澤諭吉

小泉信三

小泉信三
經濟學者
經濟學博士
慶應義塾長
東京市の人
明治二十一年生

福澤諭吉
幕末・明治の先覺者
慶應義塾創設者
舊豐前國（大分縣）中津藩士
明治三十四年歿　年六十八

福澤先生は、言ふ迄もなく、自ら文明開化の指導者を以て任じた人である。其の所謂文明開化の內容は固より多岐に亙つて居るが、第一に武人專制の封建門閥制度の一掃と、產業勞働の尊重を其の中に含むことは勿論であつた。先生が、帶刀の長さは馬鹿の長さを測ると稱して、自ら他に先んじて廢刀を斷行したことは有名な話である。此の他の點でも、先生は所謂武士の體面に拘泥しなかつた。外科手術を見て腦貧血を起したとか、暗殺がこはくて堪らなかつたとかいふことは、まづ一般に武士の言葉としては不似合であるが、先生は一向平氣でそれを口にしてゐる。だから、此等の點だけを見ると、

先生は反武人主義者であつたと言ひたくなる所であるが、まだこれだけを以て結論するのは早い。

福澤諭吉

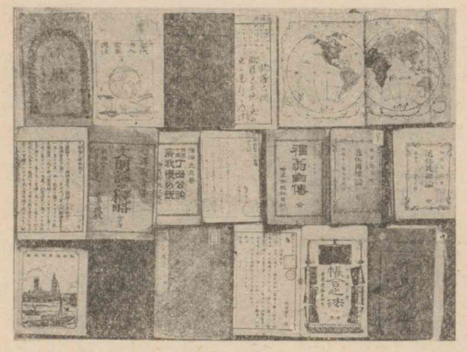
先生は殺伐を好まず、居合術を習つた外には武藝の嗜もないと自分でも言つてゐるが、併し他面に於て、不當の壓制に抵抗する爲には如何なる手段も避けられぬといふのが其の覺悟であつたから、其の方面からいふと、武力是認の結論に到達しなければならぬ。私の見る所では、慥に先生は無氣力なる文弱を嫌つて武勇を尙ぶ一面があつた。先生は自ら文明開化を唱道しながら、一面には此の文明主義が柔

丁丑公論
明治十年丁丑公論
明治三十四年刊

軟・無氣力の人を造り出すことを恐れたのである。

明治十年の作「丁丑公論」の緒言にも、「近來日本の景況を察するに、文明の虚説に欺かれて抵抗の精神は次第に衰頽するが如し。苟も憂國の士は之を救ふの術を求めざる可からず」と言つてある。又明治十一年の著「通俗國權論」の中にも、固より生命は大切であり、安身居家は人間最大の幸福であるが、しかも此の最大の幸福を抛つても尚且堅く守らなければならぬものがある。一個人に於て然り、又一國に於て然りだと説いてある。人間如何なる不義理をしても、又どんな恥をかいても必ず疊の上で病死すると決したならば、「即日より其の生は禽獸の生となり、また人類の名を下す可からず」といひ、戰爭は固より好むべきものでない、併し只管之を嫌惡して、徹頭徹尾

戰はざるものと覺悟を定め、之を恐るゝこと封建時代の「百姓・町人が白刃を見て震慄するが如き」は我が輩の取らぬ所だと痛論した。蓋し時勢に慨する所があつたのであらう。



福澤諭吉著書

又福澤先生の民權論と國權論との關係はどうかといふに、先生は固より民權論の主唱者であるから、民權論の盛行は誠に結構だが、併し其の爲に國權を忘れてはならぬ。內に民權が伸びたのは好いが、其の間に他國の侮を受けて外に國權が屈するやうな事があつては何にもならぬといふのである。明治十一年に「通俗民權論」を

書いても直ぐには發表せず、續いて「通俗國權論」の脫稿するを待つて同時に出版したのは此の用意に出でたものであると序文に斷つてある。

蓋し護國の基礎を堅めるには強大なる政府がなければならぬ。政府を強大ならしめるには國內民心の一致がなければならぬ。それが爲には國會を開いて民權を伸長せしめなければならぬ。けれども民權論勃興の勢の趨く所、當時の民權論者と政府とは互に相敵視し、民權論者は少しでも政府の權力の削弱せられることが卽ち直ちに民權を伸長する所以であると考へ、政府も亦人民に少しでも讓步してはならぬやうに思つてゐる。先生は此の間に處して、外に國權を張るため、內に官民調和するの緊要なるを說いた。所謂「內安外競の事」といふのがそれである。卽ち一方政府當局者の度量の大を求めると共に、民間有志者に對しては、唯眞正面に政府に向かつて「愚痴を述べ立て、甚だしきは漫語放言以て公衆を動搖せしめ、其の勢に乘じて無作法にも權力を取らうとするのは智慧のない趣向だ、もつと遣り方があるだらうではないかと言つたのである。斯かる調和論は、無論急進論者に喜ばれる筈がない。當然樣々の攻擊がこれに加へられた。が、先生は其の攻擊に取合はず、「是れも一時の事なり、犬の吠ゆるに異ならずと勘辨」したと書いてゐる。

福澤先生の國權論は一朝夕のことではないが、始め先生の念頭を壓迫したものは常に歐米列強の東侵であつた。隨つて基督敎國民の非基督敎國民に對する壓制の亂暴刻薄なる

ことを力說して已まず、武備を嚴にし、他に魁をして西洋に當るものは日本國民の外にない、日本の軍備は獨り日本一國を護るのみならず、兼ねて又東洋諸國を保護する爲のものだから、其の規模も遠大にしなければならぬと力說したのであつた。然るに朝鮮問題の爲、日支の國交が切迫するに至つて、先生は支那に對する警戒を說き出した。卽ち翌十五年の「兵論」には既に支那の軍備の詳細を記し、支那人を怯懦なりとするは當らぬ、怯懦の如く見えるのは唯兵制の不完全なるが爲に過ぎない。然るに其の兵制も一部分は既に改革せられた。我が士人は猶これを怯懦なりとし、輕侮せんとするか。「我が輩は士人とともに枕を高うするを得ざる者なり」と言つてゐる。そして先生は一方一私人として爲し得る限りの力を盡くして朝鮮の親日黨を援助するとともに、終始日淸開戰の避け難きを期して、其の爲の用意を說くに最も熱心なる一人であつた。

時事新報
明治十五年三月創刊
昭和十一年十二月廢刊

開戰第一の捷報が達すると、先生は直ちに時事新報紙上に、大いに資金を募集して軍費の全部を一時に償はんことを提議した。此の說は結局行はれなかつたけれども、先生自身は率先して金一萬圓を義捐した。明治二十七年當時の一萬圓は何といつても大金である。先生は家計を縮小し、老後の家計上の心配をかへりみずして醵金を決したといふことである。

先生はそれを文章に書いた。壯時外遊して日本國の弱小を歎き、涙を呑んで通宵眠らざりしは每度の事であつた、とい

私金義捐に就いて　明治二十七年八月十四日時事新報所載

ふ事から筆を起し、國の榮辱浮沈の岐れる所、今回の戰爭は如何なる事情、如何なる困難があつても、苟も全國四千萬人を盡くす迄は是非とも勝たねばならぬ大戰爭であるが、其の大切なる戰爭に、苟も資金を以て成功を助けることが出來るとあつては如何にしても聞き捨てならぬ。元來自分は寄附金が嫌ひで、從來人にも干渉してやめさせたことがある。其の寄附金嫌ひの福澤が今義捐をするといふ。諭吉は決して發狂したのではない。「唯日本國民なるが故に國事の前後緩急を思案して」此の儀に及んだのである。それ故決して烏滸がましく指圖などをする譯ではないが、世人もどうか決斷して募集に應じて貰ひたいと書いてある。これが「私金義捐に就いて」と題する文章である。此の一文は、短篇ながら、先生の愛國

日本臣民の覺悟　同月二十八九兩日同紙所載

福翁自傳　明治三十二年刊

の至情と其の日清戰爭に對する態度と面目を示して遺憾なき一の傑作である。

同時に先生は「日本臣民の覺悟」を說いた。戰爭中は官民共に政治上の恩讐を忘れよ、日本臣民は事の終局に至るまでは謹んで政府の政略を非難するな、人民相互に愛國の義を奬勵して、私に人と爭ひ、人の氣を挫くやうなことをしてはならぬ。父母の病中に兄弟喧嘩をしないと同じやうに、一切の議論や理窟は戰爭が濟んでからにして貰ひたいと論じたのである。

幸にして日本軍は連戰連勝して日本の大勝となつて局を結んだが、此の結果に對して先生が如何に感じたかは、「福翁自傳」末段の文句に一字の加ふべきものがない。

顧みて世の中を見れば堪へ難いことも多いやうだが、一

國全體の大勢は改進進歩の一方で、次第々々に上進して、數年の後の日清戰爭など官民一致の勝利、愉快とも有難いとも云ひやうがない。命あればこそこんな事を見聞するのだ。前に死んだ同志の朋友が不幸だ、あゝ見せて遣りたいと毎度私は泣きました。實を申せば、日清戰爭位何でもない。唯是、日本の外交の序開きで、それほど喜ぶにも當らないが、其の時の情に迫れば夢中にならずにはゐられない。

日清戰爭の後十年にして日露戰爭が來た。併し福澤先生は之に先だつこと三年、明治三十四年の二月三日に長逝した。先生をして明治三十八年五月、日本海海戰の捷報を聞かしめなかつたのは眞に千秋の恨事であるが、併し「唐人往來」以來「學問のすゝめ」以來、或は「文明論之概略」以來、二十年或は三十年に及ぶ先生の文明指導の努力は其の生前に於ても既に十分多くの實を結んだ。いかに割引しても、先生の晩年に於ては、少くも日本の獨立其のものに就いては最早何人も懸念を抱かなくなつたのである。學者思想家としての福澤先生は、功勞は固より大きいが、又酬いらるゝ所も多かつたといつてよい。先生自ら自己の事業成績を顧みて、「自分の既往を顧みれば遺憾なきのみか愉快な事ばかりである」といつたのは、其のありの儘の眞情であつたらうと思ふ。

唐人往來　文久中作
學問のすゝめ　十七篇　明治五―九年刊

文明論之概略　明治八年刊

福澤先生は無論個人の權利の主張者であつたが、併し同時に最も強く國家國民に對する義務を高唱した人であつたことは、上段の引用文に示さるゝ通りである。通俗の解釋は多

くたゞ前の一面に於て先生を見てゐる。それに對して、茲には特に動もすれば看過せられがちな愛國者としての先生を描くことを試みた。たゞ先生は、國民をして國を愛せしむるには、徒らに愛國の主義を說教せず、國を我が物、我が國として愛せしめなければならぬことを痛感した。是、卽ち先生が「學問のすゝめ」以來、封建的卑屈を痛擊して、終生不羈獨立の個人の價値を強調した所以である。

（師友書籍）

我が輩の眼中、滿天下に敵なし、又友なし。唯國の利害を標準として審判を下すあるのみ。

―福澤諭吉―

厨川白村
名は辰夫
英文學者　評論家
文學博士
京都帝國大學教授
京都市の人
大正十二年歿年四十四
ニューイングランド　米國東北部六州の稱
淸教徒　十六世紀中葉イギリスに起つた新教派のクリスト教徒

一四　米國の一面

厨川白村

海のかなたに新しい理想鄕を建てようとしてニューイングランドにわたつて來た淸教徒は、たゞ夢幻の國に果敢ない理想の影を追ふやうな浪漫主義者（ロマンティシスト）ではなかつた。彼等には浪漫的（ロマンティック）な半面に、實行の世界、現實の生活に於ける絕えざる努力があつた。彼等は終始一貫、信念と實行とを結びつけなければ止まない奮鬪の人々であつた。最初、新世界に移住して來た其の年の冬、凜烈な寒氣に惱まされて、彼等の多數は命を殞した。それにも屈せず、僅かな生存者は、生活の爲の惡戰苦鬪を續け、其の子孫は爾後二三世紀を出でずして、先住の民を逐ひ、佛蘭西人・和蘭人を同化し、西班牙人を驅逐し、遂には祖國

たる英國の羈絆をさへ脱するの偉業を成就した。そして、今も猶世界の各地から蝟集する新來の移住民を、同化するか、然らずんば之を驅逐せんとしつゝある有樣だ。かくの如きは、一民族の活躍の歷史として實に驚くべき事實であつて、古代・中世・近代を通じて、世界史上未だ曾て比倫を見ない大業であつたといつても過言ではなからう。そして、能くこれを爲し遂げたものは、強烈な宗教的色彩を帶びた理想主義に伴なつた、淸教徒の物質的努力と現實主義的精神とに外ならなかつた。詩人ロングフェローが歌つた「村の鍛冶屋」が「何か考へれば何か遂行した」のも「かん〳〵と叩く鐵砧の上に一つ〳〵の行爲と思想とが出來た」のも、皆今に至つて猶米國文明の特徵をなす所のものである。

ロングフェロー 1807—1882 米國の詩人

南北戰爭 奴隸存廢問題に關して米國南部諸州と北部諸州との間に起つた內亂 1861—1865

アングロサクソン イギリス國民の主系をなす民族

ミルトン 1608—1674 イギリスの詩人

十七世紀の米國淸教徒が奮鬪の物語は、今にして思へば、ただ一篇の建國神話に過ぎないかも知れぬ。しかし、最も雄辯に米人の特色を語るものは、卽ち此の神話である。

今から半世紀前、南北戰爭までは、ニューイングランドの地が米國文明の中心であり、また嚮導者であつた。其の後、西部と南部との政治・經濟上の勢力が急激に增大すると共に此の中心は失はれたが、其の古い宗教的理想主義は今猶依然として米國全體を支配してゐる。

アングロサクソンの移住民が十七世紀の昔に祖國から齎して來た古いものが、星移り物變る三百年の間に、いつか本國の英國では滅びて、却つて米國に殘つてゐるのは面白い。ミルトン時代の堅苦しい思想が、今猶米國文明の裏面に潛在し

スコットランド　イギリス大ブリテン島の北部
イングランド　大ブリテン島の南部
北カロライナ州　米國中部大西洋沿岸の一州
テンネッシー州　北カロライナ州の西に在る
ケンタッキー州　テンネッシー州の北に在る
チョーサー　1340頃—1400　イギリスの詩人

てゐることは上述の通りだが、之に似たことは他にも尠くない。言語の上などにも、英國では今日既に廢れた古い語法が、今の米人の日常語のなかに存してゐる。米國の片田舎の山奥に今も猶聞かれる樵夫の歌のなかには、スコットランドやイングランドの古い歌謠があるといふ話だ。例へば、北カロライナ州から西の方テンネッシー・ケンタッキー州に亙る一帶の山嶽重疊の地方には、十七世紀頃から近頃まで、殆ど二百萬の移住民が、他との交通少く、恰も桃源郷のやうに隔離された孤立の狀態にあつた。此のあたりには、英國の古謠が口から口へと語り傳へられて現存し、またチョーサー時代の言葉で、今はもとの英國で廢語になつてゐるものが、日常語に用ひられてゐる例が少くないと聞いてゐる。

ボストン　米國マッサチューセッツ州の首都
コンコード　同州の都邑
エマソン　1803—1882　米國の詩人・哲學者
ワイマー　ドイツ中部の都市
ゲーテの舊居　がある
ストラトフォード・オン・エヴォン　イングランド中部の都邑
シェークスピヤの舊居がある

殊に十七世紀頃の英國からの移住者には、門地高く、教養もあり學問もある人が多かつた。かういふ人たちの文庫には、神學・宗教の書物が多かつたといふのにも深い意味がある。米國黄金文明の陰に、十七世紀以前の古い英國があることを思はなければ、あの大きな謎の國を理解することは出來ない。

私がボストンの郊外に居たとき、或日、コンコードの地に哲人エマソンの舊居を訪うた。友が示す案内記に「コンコードは獨逸のワイマーや英國のストラトフォード・オン・エヴォン程に俗化してはゐない」とあるのを讀んで、見物嫌ひの私も心を動かされたのであつた。青葉の蔭なつかしき五月の半ば、昔清教徒が耕した麥隴・菜畝の間を行くこと數里、コンコードのとある旗亭に憩ひ、所謂「ニューイングランドの質素」を想は

ソロー 1817—1862 米國の文學者
ホーソーン 1804—1864 米國の小說家
シカゴ 米國イリノイ州の首都
ニューヨーク 米國ニューヨーク州の首都
ワシントン 米國の首府
ケンブリッヂ セーレム 共にマッサチューセッツ州の都市

せるやうな田舍料理を味はつて後、綠滴る森の木の間を流れる小川のほとりに古風な馬車を走らせた時ばかりは、米國にもこんな所があるのかと思つた。そして高邁な識見を以て世界を動かした思想家エマソンの家を見、森林生活の讃美者ソローが筆を執つた池のほとりをさまよひ、去つてまた小山のほとりにホーソーンの墓に詣でて、私は美しい夢の樣な半日を過した。シカゴやニューヨークやワシントンは、たゞ纔かに米國の一面を語るに過ぎない。ボストン郊外のケンブリッヂ・コンコード、さてはまた淸教徒に最も緣の深いセーレムの町などを訪うて、はじめて米國文明の奧に潛む理想主義の面影を見ることが出來るのだと、私は其の時しみ〴〵感じた。

（印象記）

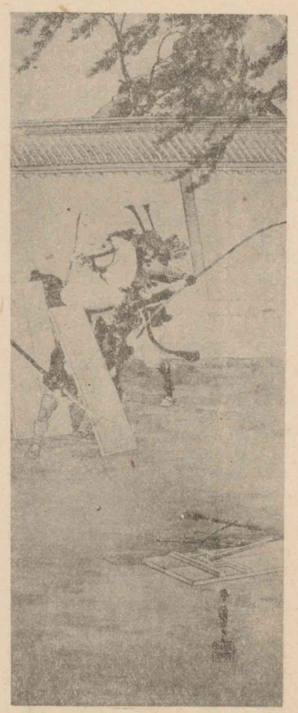
鎭西八郎爲朝 源爲朝 爲義の第八子
新院 崇德上皇 第七十五代
齋院の御所 白河殿の一殿
北殿 白河北殿 現京都市左京區に在つた
左府 藤原頼長 左大臣
白河殿 現左京區岡崎に在つた
平馬助忠正 淸盛の叔父
六條判官爲義 源爲義
義朝 源義朝 爲義の長子

一五 鎭西八郎爲朝

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にてまゐり給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、竝びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎許りには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝につきて、多分は內裏へ參りけり。爰に鎭西八郎爲朝は、「我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ。高名・不覺も紛れぬやうに、只一人如何にも強からん方へ差向け給へ。縱令千騎もあれ、萬騎もあれ、一方

左衛門大夫家弘　平家弘

は射拂はんずるなり」とぞ申しける。依つて西河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十騎とぞ聞えし。



鎭西八郎爲朝（谷口香嶠筆）

抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたる事、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢繼早の手きゝなり。弓手の肘、馬手に四寸伸びて、矢束を引く事世に越えたり。幼少より不敵にして、兄にも所をおかず、傍若無人なりしかば、身にそへて都に置きなば、

鎭西　九州

豐後國　現大分縣の內

肥後國　現熊本縣

筑紫　九州

菊池・原田　共に九州の豪族

香椎宮　現福岡縣糟屋郡香椎村に在る官幣大社

祭神仲哀天皇・神功皇后

久壽元年　一八一四年

近衛天皇の御代

德大寺中納言公能卿　藤原公能　右大臣

惡しかりなんとて、父不孝して、十三の歲より鎭西の方へ追ひ下すに、豐後國に居住し、尾張權守家遠を傅とし、肥後國阿曾平四郎忠景が子三郎忠國が壻になつて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へんとしければ、菊池・原田を始めとして、所々に城を構へて立籠れば、「其の儀ならば、いで落して見せん」とて、未だ勢もつかざるに、忠國許りを案內者として、十三の歲の三月の末より十五の歲の十月まで、大事の軍をする事二十餘度、城を落す事數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を打つ術、人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻め落して、自ら總追捕使に押しなつて、惡行多かりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り訴へ申す間、往にし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

然れども爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。其の儀ならば、我こそ如何なる罪科にも行はれんずれ」とて、急ぎ上りければ、國人どもも上洛すべき由申しけれど、「大勢にて罷り上らん事、上聞穩便ならず」とて、形の如くに附き從ふ兵ばかり召し具しけり。乳母子の箭前拂の須藤九郎家季、其の兄透間數への惡七別當、手取の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦の二郎左中次、吉田の兵衞、打手の紀八、高間の三郎、同じき四郎を始めとして、二十八騎をぞ具したりける。依つて去年より在京したりしを、父不孝を赦して、今度の御大事に召し具しけるなり。

八龍　源家重代の鎧
樊噲　漢の高祖の功臣
猛將　張良　漢の高祖の功臣
智將　吳子・孫子　吳起と孫武共に支那周代の兵法家
養由　養由基　周代の弓術の名手

爲朝は七尺許りなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫うたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈌打つたるに三十六差したる黑羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破る事、吳子・孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふ事なし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとてこぞり給ふ。

左府卽ち「合戰の趣計らひ申せ」と宣ひければ、畏まつて、「爲朝

高松殿　現京都市中京區に在つた後白河天皇の御所假内裏
清盛　平清盛

久しく鎭西に居住仕つて、九國の者共從へ候について、大小の合戰數を知らず。中にも、折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡すにも、皆利を得る事夜討に如くこと侍らず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。但し、兄にて候義朝などこそかけ出でんずらめ。それも眞中差して射通し候ひなん。まして清盛などがへろ〳〵矢、何程の事か候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へならば、御許されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃げ去り候はんずらん。其の時爲朝まゐり向かひ、行幸を此の御所へ成し奉り候はん事、掌を

主上　後白河天皇第七十七代
南都興福寺　南都興福寺の別稱
法相宗三大本山の一　現奈良市登大路町に在る
吉野　吉野山　現奈良縣吉野郡に在る修驗道の本山金峰山寺の寺界
十津川　十津川郷　現同郡南部の地
宇治　現京都府久世郡宇治町及び宇治郡宇治村附近の地
富家殿　藤原忠實　頼長の父

返すが如くに候べし。主上を迎へまゐらせん事、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき」と、憚る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎・二十騎の私事なり。流石天下の御大事に、源平數を盡くして、兩方にあつて勝負を決せんに、無下に然るべからず。其の上南都の衆徒を召さるる事あり。興福寺の信實・玄實等、吉野・十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者共を召し具して、千餘騎にてまゐるが、今夜は宇治に著き、富家殿の見參に入り、曉是へ參るべし。彼等を待ち調へて合戰をば致すべし。又明日、院司の公卿・殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬる事兩

三人に及ばば、殘りはなどか參らざるべき」と仰せられければ、爲朝、上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任かせらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奧義を極めたる者なれば、さだめて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戰ふともいかで利あらんや。敵、勝に乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しき事かな」とぞ申しける。

（保元物語）

保元物語
三卷
鎌倉時代初期に成つた軍記物語
作者未詳

一六　元寇

三宅雪嶺

三宅雪嶺
名は雄二郎
評論家
文學博士
帝國藝術院會員
金澤市の人
萬延元年（一八五二〇）生
北條時宗
鎌倉幕府第八代の執權
弘安七年（一九四四）歿
年三十四
元
支那の國號
蒙古人の國
皇紀一九三一—二〇二八年

日露戰役の酣なるに際し、朝廷は特に北條時宗に從一位を追贈せさせ給ひぬ。惟ふに、元寇に際しての彼の偉功を追念せさせ給ひてなるべし。

當時元は國を滅すこと四十有餘、能く其の呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たびこれと干戈を交ふるや、之を擊破して、また近海に出沒すること能はざらしめたり。初め、元は使者を遣はして好を通ぜんことを求め、時宗斷乎として之を拒み、戰端こゝに開かれぬ。

これに就きて、自ら三箇の疑問の出づるあり。其の一、拒絕は果して時宗の意志に出でしか。其の二、拒絕は果して道理

文永五年
一九二八年
龜山天皇の御代

弘安四年
一九四一年
後宇多天皇の御代

を具へしか。其の三拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の意よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし人々の與り關せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣はしたるは、實に文永五年のことなりき。時宗年甫めて十八、其の拒絶の獨斷ならざりしや明らかなり。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を經て弘安四年に至り、終に大擧して入寇す。時に時宗意氣方に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に、一戰して元兵を鏖にしたる、時宗與りて功ありとす。唯十三年間其の方針の同一なりしは、國論の之を致ししものといふべし。

元の好を通ぜんことを求め、而して我の之を拒絶せしは、稍

高麗
朝鮮の國號
皇紀一五七八
一二〇五二年

穩ならざるに似たれども、彼の國書を閲するに、實に我に於て然するの已むべからざるものありしを見る。其の書や、文辭堂々、恩威竝び具る。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲ししならんも、顧みて我が國の歴史より考ふれば、斷然拒絶するの外、採るべき策なし。其の「問を通じ好を結び、以て相親睦せん」といへるは、辭として難ずべきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視せんとする意あるは明らかなり。彼に於ては何等異とする所にあらざりしならんも、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。我が國民は、上下を問はず、彼我對等を以て自ら居り、我を以て彼に優ると信ぜしものも少からず。今、端なくかくの如き國書に接す、怒らざらんと欲するも豈得べけんや。當時此

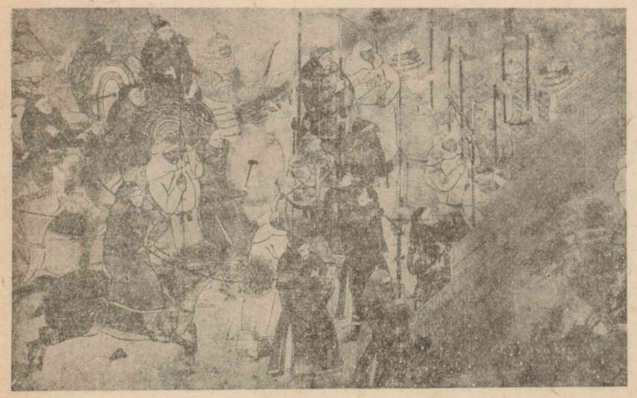
元主　元の世祖忽必烈　皇紀一九五四年歿

我が軍の石壘

の國書を覽し者、一人として其の不遜なるを咎め、且憤らざりしは無かりしならん。唯、國土の廣狹相懸隔するの著しきによりて彼の實力を誤信せし者は、圓滑に局を結ぶを利として開戰に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしなり。

元主使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟す、其の怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りて已むを得ざりし所ならん。乃ち已むを得ざりし所ならん

と雖も、其の此に出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、敢へて此の擧に出でざりしなるべし。彼既に開戰に決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄に起り、兵船多く覆沒す。我が兵之に乘じて襲擊し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり、「當時若し颶風の起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん」と。言者の說にして



蒙古軍陣營

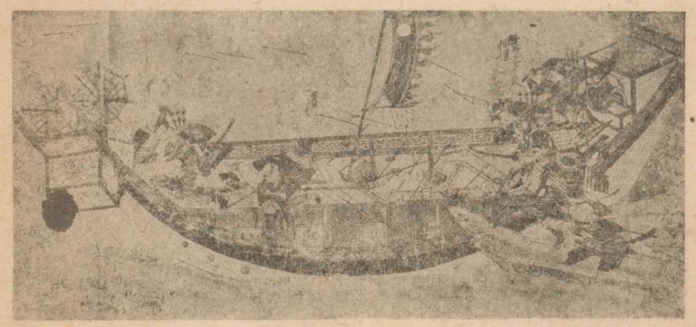
コロンブス
1446頃—1506
アメリカ大陸發見者
イタリヤの人

當れりとせば、則ちかの開戰に決せしは策の宜しきを得ざりしものと謂ふべきに似たれど、しかも其の言ふ所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戰に決せしは、必勝の算ありて然りしなり。假りに颶風起らずして、彼の陸兵悉く上陸し得たりとも、いかでか能く日本征服の功を擧げ得べき。

元の時代は、支那古今を通じて造船術の最も發達せし時代と稱せられ、我に寇せし兵船は、コロンブスの亞米利加發見に用ゐしものよりも更に堅固なりしと傳へらるれど、其の颶風に遭ひて多く破壞せしに觀れば、以て略構造の如何を察するに足らん。彼頻りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せし事は嘗てこれ無し。隨つて、彼が果して操船に巧みなりしやも疑なきを得ず。又十萬・二十萬の軍隊を送遣して其

承久の變
承久三年（一八八一）後鳥羽上皇が北條氏討伐を企てさせられた事變

の兵站の連繼を過らざること、果して其の能くするを得る所なるか。糧に敵に據るの心算なりしとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。若し我に於て拱手無爲、彼の欲する所に隨ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべきも、これ到底望みて得べからざる所ならずや。啻に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戰に於て、彼また勝つべからざる運命なりしなり。承久の



敵艦襲撃

北條氏の兵
北條泰時及び時房の軍

マルコ・ポーロ
1254—1323
イタリヤの旅行家
日本を初めて歐洲に紹介した

變、北條氏の兵畿內を指して西上せし者十九萬人、若し之に關西の兵を合すれば、數に於て優に元兵の上に出づるを得じや必せり。加ふるに、我は地理に精しく、便利を占むること亦多し、十萬・二十萬の元兵を擊摧するに於て何かあらん。戰亂を見ざる五十餘年に亙りしと雖も、國を擧げて武門の治下に在り、武を練ること未だ曾て一日も怠ることなし。爾後久しきを經ずして所謂戰國時代を現出し、數百年間鬪爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時此の鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、之を殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且マルコ・ポーロの記する所に據れば、元兵の大敗せしは兩將の不和に因れるが如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が主將の不和なるに加ふ、單に此の一事に於て、勝敗の數既に明

龜山上皇
第九十代

らかなりといふべし。かく、如何なる點より考察するも、我、彼を殲滅するの理ありて、彼、我を征服するの虞なし。我の斷々乎として拒絕せる、決して無謀の擧にあらず。神風の加護に賴りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは、謬想も甚だしきものなりといふべし。

龜山上皇、御身を以て國難に代らんことを祈らせ給ふ、國內の民誰か奮つて國に殉ぜんとせざらん。之が爲に、上下擧りて國難に當らんとの決心を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしとせんか、我が兵の如何に勇を鼓して之を邀擊せしかは知るべきなり。勿論初は多少の苦戰ありしならんも、終には海上に於けると同じく全勝を制し、更に勢に乘じて高麗を略し、かくて醞釀しつゝ

ありし國内の紛爭を外に向かはしむるを得しなるべく、ために、獨り我が日本の較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體も亦大いに進歩の見るべきものありしならん。　颶風起りて戰はずして勝ち、竟に武を海外に用ゐず、徒らに國内の紛爭に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極みと謂ふべし。

元は一敗して後、更に再擧を計らんとせしが、諫むる者ありて遂に止めり、智とすべきなり。　此の一役に於てすら、海岸到る處に造船の音喧しく、ために費しし所莫大の額なりしと傳ふ。　若し一敗に懲りずして再擧を計り、一層大なる準備を整へて來寇せしならば、國力の底を傾くるに至りしは疑ふべからず、何ぞ八十年後に分割せらるゝを俟たんや。

（小泡十種）

高山樗牛
名は林次郎
評論家
文學博士
山形縣の人
明治三十五年
歿　年三十二

日蓮上人
俗姓貫名
日蓮宗の開祖
弘安五年（一九四二）歿
年六十一

法華經
妙法蓮華經
二十八品
大乘經典の一

一七　日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上あらゆる時代を通じて類稀なる豪傑なり。　上人は、宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、此の大願の前には、如何なる迫害を被るとも動ぜざるの覺悟を以て、「法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり」と喝破し、眼中何等の權勢もなく、また威武もなき、眞に高天闊地獨立獨歩の大豪傑なりき。　さりとて豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。　上人が人情に篤く、恩誼に深く、其の情、時として禽獸の末にまでも及び

四條金吾　四條頼基
法名日頼　正安二年（一九六〇）歿年七十三
江馬遠江守　北條光時義時の孫
龍の口　現神奈川縣鎌倉郡片瀬町の内

しことは、人をして感涙に咽ばしむるものあり。今、上人の遺文に見ゆるものの中より一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に、四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。此の人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て、上人と共に種々の迫害を被れり。上人の龍の口に斬られんとせし時の如き、路上に馬の轡を取りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんとせり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息を寄せて、藹然たる恩愛の至情を表し給へり。

日蓮上人

殿　四條頼基

本化門　日蓮宗
身延　身延山　現山梨縣南巨摩郡に在る白峯山脈の一峯　日蓮宗の總本山久遠寺の寺界
房州　安房國　現千葉縣の内

就中、「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。假令、釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎へ給ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に墜つべし」との意を述べられしが如き、其の恩愛の情の濃なること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於て此の兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なるは、六十年の生涯を通じて最も明らかに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置くに處なくして身延の深谷に隱るゝや、九箇年が間、五十餘町の險山を、日に一度は必ず攀ぢ登りて、遙かに故郷なる房州を煙波の

甲州
甲斐國
現山梨縣
武州池上
現東京市大森
區池上本町
日蓮入寂の地
日蓮宗四大本
山の一本門寺
が在る
波木井氏
南部實長
法號日圓
永仁五年（一
九五七）歿
年七十五

間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せられしが如き、古今東西の如何なる孝子傳中之と比較し得べき美談ありや。

上人病篤くして、甲州身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人此の馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井氏に送る書の中にも、此の馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を附けて候はば覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、此の舍人を附け置き候はんと存じ候」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しまるゝ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は能く人の爲し難きを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃なるものなり。人に忍び世に戻るをのみ豪傑の業と心得るは、其の半面を遺れたるものなり。此の情愛なくばかの豪邁もあらじ。かの豪邁あればこそ此の情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表は花と刺と別々に織り成さるれども、裏面は花を織る絲卽ち是、刺を織る絲にあらずや。

（樗牛全集）

開目抄
二卷
日蓮宗の聖典
五大部の一
日蓮著
文永九年（一
九三二）成

我、日本ノ柱トナラン、我、日本ノ眼目トナラン、我、日本ノ大船トナランナドト誓ヒシ願破ルベカラズ。

（開目鈔）

一八 狐塚

主「このあたりの者でござる。某山田を數多持つてござる。當年は殊の外よう出來てござる。さりながら、この頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼び出し、山田の番にやらうと存ずる。」

主「やい〳〵、太郎冠者あるか。」

太「はあ。御前にをります。」

主「汝を呼び出す事、別の事ではない。當年は身共の山田が殊の外よう出來た。それにつき、この頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥・獸も來たらば、追うて番をせい。」

太「畏まつてござる。私一人でござるか。」

主「いや後程は次郎冠者も見舞にやらう程に先づ行け。」

太「心得ました。」

主「さりながら、この中は狐塚の狐が出て化すといふ程に、化されぬやうにして番をせい。」

太「それはこはい事でござる。最早參ります。」

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「はあ。」

太「さても〳〵、迷惑な事いひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。參る程にこれぢや。先づこれにゐて番を致さう。」

主「太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めてさびしうしてゐるでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。」

主「やい〳〵、次郎冠者あるか。」

次「これにをります。」

主「汝は大儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏まつてござる。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。」

次「これはさて迷惑なれども、參らずばなるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うてどこやら知れる事でない。

呼ばはつて見よう。」

次「ほういい〳〵、太郎冠者やい、どこにゐるぞ。」

太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。ようし似せた。おのれ化さるゝ事では無いぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次「ほういい〳〵。」

太「ほういい〳〵。こゝにゐるは。」

次「どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐるは。やあ、次郎冠者か。」

次「なか〳〵。賴うだ人がいひつけられて伽に來たは。」

太「ようこそおりやつたれ。さても〳〵よう化けた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。」

太「やい次郎冠者、最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追うたれば、こなたの山へくわらくわらと逃げたは。」

次「それはでかした。」

太「どつこへ。やる事ではないぞ。」

（後から鳴子の縄で次郎冠者を後手にしばる。）

次「これは何とするぞ。」

太「何とするとは。狐め、化さるゝ事ではないぞ。」

次「おれは次郎冠者ぢや。」

狐塚（江戸初期肉筆畫）

太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつて置いて。狐殿、よい體の。おのれ今に皮を剝いでくれうぞ。」

主「太郎冠者・次郎冠者を山田へ遣はしてござる。心もとなうござる。見に參らうと存ずる。」

主「ほういゝ。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほういほういゝ。」

太「これはいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。」

太「ほういゝ。」

主「ほういゝ。どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐます。」

主「やあ、これにゐるか。さびしからうと思うて見舞に來た。次郎冠者を先へ遣したが。」

太「なか〳〵。あれにゐます。これはいかな事。これもよう化けた。そのまゝ賴うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。」

主「これは何とするぞ。身共ぢや。」

太「おのれもよう化けた。先づ縛つて、この大木にくゝりつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあ〳〵、尾を出せ。鳴け鳴け。」

主「おのれ太郎冠者め。主をこのやうにして、罰當りめ。」

太「何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者狐もふすべてやらう。さあ〳〵、鳴け〳〵、こん〳〵といへ。」

次「これは何とする。」

太「あれや〳〵、いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて來て、皮を剝いでくれうぞ。待つてをれ。ようし化さうと思うたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。」

主「さても〳〵、氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次「さやうでござる。此方は賴うだ御方か。」

主「なか〳〵。汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と鎌を取つて來る、殺さうといひをつたが、何とそちが縄はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら繩が解けさうにござる。解けますぞ、解けますぞ。さあ解きました。どれ〳〵、此方も解きませう。さても〳〵憎い奴でござる。何としたものでござらう。」

主「いや〳〵、この體ではそばへよるまい程に、元のやうにしてゐて、これへ來たらば捕へてあいつを搖りにあげう。」

次「一段とようござらう。」

主「さあこれへよつて元のやうにしてゐよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながらをるか知らぬ。この鎌で打ち殺してくれう。さあ今打ち殺すぞ、打ち殺すぞ。」

主「それや次郎冠者。」

次「心得ました。」

主「おのれは憎い奴の。次郎冠者、足を持て。」

次「心得ました。」

主「さあ、搖りに上げ、搖りに上げ。」

太「これは何と狐どもするぞ。」

主「狐とは、まだ、おのれめは憎い奴の。縛りをつたがよいか。これがよいか。」

太「さては賴うだ人、次郎冠者か。免させられ。まつぴら、ごゆるされ。まつぴら、ごゆるされ。」

次、主「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」

（續狂言記）

續狂言記
五卷
狂言集
元祿十三年
（一六七〇）刊

大島亮吉
山嶽研究家
東京市の人
昭和三年歿
年三十

綱木
山形縣南置賜郡南原村綱木檜原峠の北麓に在る

檜原の峠
檜原峠
山形・福島兩縣の界に在る

一九 足跡

大島亮吉

四月の初といふのに、綱木とよぶ山間の小村には、冬から持ち越してきた堆雪がまだ道さへ深く蔽うてゐる。雪曇といふやうなその朝の空合は、まだ雪が深いといふ檜原の峠をたつた一人で越えることを私に躊躇させた。雪道のつらさを、その村へ來るまでに、既に私は十分に味はつてゐた。けれども、假の旅宿を強ひて賴んだその家の主が、四日ほど前に一人の旅人がそこを越えて行つたから、まだその足跡は殘つてゐるだらうと勵ましてくれたので、私はとう〳〵出かけることにきめた。村はづれまでは雪道がかたく踏まれてゐて比較的歩きよかつたが、村を一歩出外れると、もうたゞ一面の雪で

羽前
羽前國
現山形縣の内
岩代
岩代國
現福島縣の内

あつた。そしてその峠路とおぼしい道筋には、なるほど一人の人の歩いて行つた深い足跡が遠くつゞいてゐた。

檜原峠といへば、ちやうど羽前と岩代との國境になつてゐるので、村と村との行き交ひは少しもなく、郵便脚夫も通はない山越えで、地圖もまことにたより少いものだつた。隨つて、先に越えたといふ見知らぬ旅人の殘して行つてくれた足跡こそ、ほんとうに自分を導いてくれる唯一のものであつた。私は、旅人が旅人に與へる一つの大きな惠を感じ、それを感謝しつゝ、雪のなかに深く落ちこんでゐるその足跡を、一つ〳〵辿つて行つた。それが、先なる旅人に對するいみじくもさゝやかな禮儀のやうに思はれたからである。先なる旅人の苦しみつゝ踏んだその足跡を踏みかへして行くことは、勿論勞

力に於ても少からざる恩惠である。けれども私には、その時そんな功利的な打算を除いても、なほ純然たる感謝の念があつたことを今もなほ思ひ返して感ずることが出來る。それはたゞ、旅するとき我々の心の表面に浮かぶ、あの淡い感傷に過ぎなかつたらうか。私は否と答へる。未だかゝる山の旅になれない年若い旅人として、このやうな雪の峠を一人で越すとしたならば、何人もおそらく私に似た心持を感じたであらう。まこと、「一處に停滯するとき水が腐るやうに、人が一處に據住するときその魂は饐える。人は流轉の旅に於てのみ、最も人間らしい自分の魂の素直さを豐に見出すことができる」のだ。そして、「旅に於てのみ人は嬰兒のやうな、小鳥のやうな自分の魂の影を見出すことができる」のだ。かうしたさゝやかな心事から推して、芭蕉が、あの寛(ゆるやか)な、感謝と敬虔に充ちた心から、終には天地の寂びに浸り、永遠の世界に融合しようとする、眞に人生の旅人らしい心境を得るに至つたことも髣髴される。

峠は高さわづかに千五百メートル位なものであつたらうが、雪曇の空はとう〳〵淡い春の雪雨になつた。その頂を越えるあたり、私は自らの寂寥な影、孤獨に堪へない影を見た。その故にこそ、先に行つた旅人への感謝の念が、かく強く湧き起つたのであつた。曇つた空のもとに、鈍く鉛色に光つてゐる檜原湖の凍つた湖面が視野に間近くあらはれるまで、私はそのやうなことを思ひ、「路」そのものの生成の歴史などを考へて、雪路に苦しい歩を運んでゐた。

檜原湖　檜原峠の南、福島縣耶麻郡に在る

私がその時辿つた、たつた一人の人の足跡こそは、まさに路の生成の歴史のほんとうに最初のものであつたのだ。路は必要から成立ち、その後の困難と勞苦と長い間の努力の繼續とによつてその生命を維持するのだ。一人の人の踏んだ足跡に從つて、草をわけ、枝を拂ひ、木を伐りなどしつゝ、その後につゞいた多くの足跡の連續が路となつたのだ。それからは石を斫り、岩を裂き、川に架して、路は益路らしくなつて來たのだ。それ故、路は實に多くの人々の長い間の努力と忍耐とによつて育てられ、その生命をつゞけてゐるのである。この故に、まことの旅人はすべての路を心から感謝して歩むことであらうし、路はすべての旅人に對して、最も廣い、最も溫かな心の道づれであるだらう。

越後　越後國　現新潟縣の内

會津　福島縣若松市を中心とする同縣の西部五郡地方の稱

夕暮間近に、私は雨にやはらいだ雪路に惱みながらも、漸く檜原湖畔の小さな旅宿にたどりつくことができた。その翌る日、旅宿の人に向かつて、四日ほど前に綱木の村から峠を越してきた旅の人はどんな人だつたかとたづねてみた。すると、それは越後から來た、鋏や剃刀など小さな金物類を賣り歩く一人の旅商人だつたといふことであつた。そしてその旅商人は、もう昨日會津へ向かつて下つて行つたといふことであつた。私は、見知らぬ、そしてまた假令逢つてもそれと知る由もない旅の商人に、今なほ心からの感謝を捧げてゐる。

（山）

中村吉藏　劇作家　早稻田大學教授　島根縣の人　明治十年生

井伊大老　井伊直弼　近江國（滋賀縣）彦根藩主　萬延元年（二五二〇）歿　年四十六

宇津木六之丞　井伊家の臣　文久二年（二五二二）歿　年五十四

松平信發　上野國（群馬縣）矢田藩主　明治二十三年歿　年六十七

井伊邸　現東京市麴町區永田町に在つた

二〇　井伊大老

中村吉藏

人物

大老　井伊掃部頭

大老御用人　宇津木六之丞

左兵衞督　松平信發

場所

江戸　井伊邸

時

萬延元年三月二日夜

松平　今日は宵節句のお催に御案内を頂きまして有難うございます。直ぐ御茶室へとの事でしたが、ちと御内談を申したい子細があつて、押して此方へ通りました。御來客の

狩野永岳　畫家　京都の人　慶應三年（二五二七）歿　年七十八

國元の寺　清涼寺　現滋賀縣彦根市に在る曹洞宗の寺

御邪魔でもした譯ではありませんでしたか。

井伊　いや、今日はようこそお出で下さつた。只今のは、別に來客といふ譯ではありません。かねて狩野永岳へ頼んでおいた私の壽像が出來上りましたので、それを國元の寺へ納める爲に、使者に託したのでございます。

松平　では、あの御壽像が愈出來いたしましたかな。それは拜見いたしたかつた。……併しその繪姿より、かうして束帶の正のお姿が拜まれたのは珍しい事と思ひますが、畫工にお寫させなさる爲でございましたか。

井伊（微笑）いや、今日は一寸參内しましたのぢや。

松平（訝しさうに）え？……

井伊　内裏へな。

去年　安政六年　二五一九年　孝明天皇の御代

水戸家　德川氏三家の一　家康の十一男　頼房の後　常陸國（茨城縣）水戸藩主　當主十代德川齊篤

御上使　水戸家の後見　德川齊昭に螢居を命ずる上使

松平（頷き）成程、……御心中察し入ります。

井伊　掃部頭、存命中は最早京都へ參朝する時節も來まいと思ひましてな。

松平　一應は御尤もと思ひますが、併し人間は命さへあれば、又どのやうな風が吹いて來るか分かつたものではございませぬ。已に去年の秋も、おめがねにより、不肖、大任を承つて水戸家へ御上使に立ちました夜は、もう必死の覺悟で、二度と御目にはかゝれぬものと思ひ詰めてをりました。お蔭で無事に大任を果し、今年も亦かうして麗かな春にめぐり逢ひ、宵節句のお招きに預ることが出來ました。世間にも申す通り、命あつての物種でございます。

井伊　御尤もの次第ぢやが、その命といふ奴があるやうでないもの、ないやうであるもの、それに執著するのは、迷の因でございませうでな。

別勅　安政五年朝廷から水戸家へ賜はつた勅諚

長岡　現茨城縣東茨城郡長岡村長岡

前中納言家　德川齊昭　水戸家九代の主　萬延元年歿年六十一

松平（膝を進め）いや、實はその事で、御内談がしたいと思つたのでございます。大老のお命は、今こそ最も大切になさらなければならぬ時でございますぞ。御自分のお命であつて御自分のお命でない、天下の爲、又幕府の爲に、預り物のやうな大切なお命ではございませんか。近頃水戸家へお達しなされた例の別勅返上の御上意から、水戸藩の荒氣な向ふ見ずの武士等大勢長岡驛に屯して、容易ならぬ形勢になつてゐました所、已にお聞き及びでもございませうが、その中の誰彼は祕かに脫走して、江戸城下に入りこみました樣子でございます。元來、水戸家の陰謀を覆し、前中納言家を

蟄居させ、又この度、別勅返上の上意を傳へられることになつたのは、皆、大老のお腹一つから出た事と、彼等は一途に大老を怨み、首を獲て甘心せんとまで逸りに逸つてゐるのは、鏡にかけて見るやうなものでございます。大老のお命は、誠に風前の燈とも、草頭の露とも申すべきものでございませう。この際、一時、御職務を辭退せられ、彼等の無謀の刃をかはされて、天下の爲に、又幕府の爲に、無くてはならぬかけがへのない大切なお命を行末永く取留める策を取られるのが、眞の忠節の道と信じます。そして、世間の物議の自ら鎭まる日を見計らひ、再び出仕せられるのがよからうかと思ひます。日常の御交誼甲斐に、左兵衛督が赤心を打割つた御忠言を申します。枉げて御聽き入れ下さい。

先將軍家
德川家定
第十三代將軍
安政五年歿
年三十五

幼君
德川家茂
第十四代將軍
慶應元年歿
年二十一

井伊　御親切は忝い、……御厚意の程は何とも御禮の申し上げやうもありませんが、私は先將軍家の遺命を奉じて、幼君を輔佐する大任に當つてゐるのでございますから、一身が危いからと云つてその職を去ることはむづかしうございます。まあ見られい、あの額の「至誠」の二字も、近頃、幼君が自ら御筆を取つて書いて下しおかれたもので、今更、生命惜しさに逃げも隱れも出來ますまい。萬、御察し下さい。

松平　顏を見上げて沈思）……お胸の中の苦しさは萬々お察し申してをりますが、今一應、篤とお考へ直しを願へますまいか。御一生、御隱居なされいと云ふのではありませぬ。ここ一時の事でございます。その方が却つて……。

井伊（遮つて）いや、よく分かつてをります。今日まで一家一

門のものも、さま〳〵に諫言はしてくれましたが、私は一旦自分の心でかうと定めた事は、どなたが何といはれても枉げませぬ。枉げては自分でなくなります。唯御厚意は決して忘れませぬ。

松平（そつと溜息をついて）……その御氣象はよく呑みこんでをりますが、今日の形勢を見てはどうも默つてはをられませんので、御忠言を申しました。……どうしてもお聽き入れがなければ致し方もございませんが、では、せめて今後はお供廻りの人數を增して十分に警固させ、聊かも手ぬかりのないやうに、御用心の上にも御用心をせらるゝやうお願ひします。

井伊　左兵衛督、生死禍福は一に皆天命によるものではござ

東照宮
德川家康
黑船渡來
嘉永六年（一八五一三）六月アメリカの水師提督ペリーの率ゐる米國艦隊の渡來

いませんか。刺客が若し私を斃さうとしても、天命が來なければ斃すことは出來ますまいが、若しそれが果して天命なら、如何に用心しても避けることはなりますまい。その上、供廻りの人數にも自ら一定の格式がありますから、自分が大老の職に在つて、自分でそれを破つては、三百の大小名を取締ることは出來かねませう。折角の御忠告ぢやが、それも何卒お察し下さい。

松平（熱心に）御說一應は御尤もでございますが、私は大老御一人の爲に申してはをりませぬ。東照宮以來今日まで二百五十年、天下御勢望に服して、三百の大小名一人として台命にそむく者はなかつたのでございます。それが黑船渡來一件からは、とかく世の中の大綱が弛んで、どうなること

かと危まれましたのに、それを二度、ぐつと引緊められて、今權威赫々たる幕府の大老たるお身が、萬一刺客の手にかゝられるやうな不祥事でも出來しましたら、それこそ天下の御勢望も忽ち地に墮ちて、幕府の礎は覆るかも知れませぬ。さすれば、貴殿は假令職務の爲にお斃れなされても、天下のお爲にはなりませぬ。いや、却つて敵方には、己が威福をほしいまゝにした爲に天罰が下つたのぢやと嘲られ、身方の爲には犬死同然と申すものではございませんか。

井伊　……さ程まで私の一身を思うてくれられ、又天下の爲を憂へてゐられる貴殿の誠心は、私の胸にこたへます。決して疎かに聞き流してゐるわけではございません。實は私も、夜半に人が寢靜まつた頃、只獨りでつく〴〵自分の胸

に問ひ胸に答へて見ますと、敵方の所謂己が威福をほしいまゝにするといふ譏も、みな中傷ばかりでもないやうに思ひ當る節がございます。いや、自分では強ちさう氣づいてした事でなうても、一旦かうと信じたら何處々々までもそれをやり通さうとするのは、已に自分の我執ともいへませう。自分の我執と他人の我執とが衝ち合つて、世の中には爭も起り、鬪も始る。それも達觀すれば、苟も生を享けた者が、この娑婆世界の濁つた壺の底の方から、明るい瑠璃光の空を慕うて、浮かび上らうと互にもがきあがく阿呵の息吹、唯一途に、その爭が醜いとも、その鬪が呪はしいともいひ切れませぬ。泥土の底をくゞつて來なければ、清淨無垢の蓮華は咲かない。世に常住の善もなく、不斷の

彌勒慈氏菩薩　五十六億七千萬年の後この世に下降して成道正覺し衆生を濟度する將來佛

薪盡きて云々　佛此夜滅度、如二薪盡火滅一（法華經）

惡もなく、總べてが裁かれるのは、唯、彌勒の出世を待たねばなりますまい。……いや、大分御法談めいて來ましたが、まあこれで自分の我執はもうとほしてゐます。自分のしたい事、すべき事と思ひ詰めたものは先づ片がつきました。薪盡きて火は滅する。幕府への御奉公も、もう仕納めの時節が到來したかと思ひますから、この上は、私が刺客の手にかかるのが寧ろ本望で、それで他人の我執が通り、今まで鬱憤に鬱憤を重ねた水戸の君臣等の幕府に對する怨も解けませうから、却つて天下の爲かと思ひます。

松平　（少し鋭い口調で）天下に、幕府を怨んでゐる者は水戸ばかりだと思はれますか。

井伊　いや、水戸ばかりではありますまい。いや、幕府も私も

あの大獄　安政の大獄　安政五年直弼が條約調印・家茂迎立に反對した公卿・諸侯・志士を處罰した事件

御本丸　江戸城の本丸

天下の諸藩に怨まれてゐませう。斬つたものは斬られ、殺した者は殺されるのが因果の道理で、私はあの大獄を起す時、始からその覺悟を定めてかゝりました。私の一命は何でもないが、實はそれよりも恐しいのは、封建世襲の制度が今天下萬民の心に呪はれてゐる事で、あの黑船の渡來は、その封建制度瓦解の警鐘を打ち鳴らしたものでありました。これも時勢ぢやが、去年の暮に御本丸の燒け落ちたのを見た掃部頭は、この黑い眼でもう一度幕府の瓦解をまで見度くは思ひませぬ、……又二度と再び同胞の血を見てはなりませぬ。

松平　（眼を睜つて）　え？　では幕府は瓦解との御見込でございますか。

井伊　いや、これは唯、私の不吉な夢物語だから、決して御他言は下さるな。

松平　不吉な夢物語？……さうでございませうとも、……そんな筈はありません。いや、大老の御存命中は決して左樣な事はありますまい。是非ともお命を大切になさるやう、折入つてお願ひ申し上げます。

宇津木（出て來り）　お客樣方、お揃ひにございますが。

井伊　さうか、……では服を改めよう。

松平　今暫く、……暫くの間、……

井伊　もう御說は十分承りました。……御免。（起ちかゝる。）

松平　ま……ま……暫く。（袖を捉へる。）

井伊　お放しなされい。（振り切つて奥に入る。）

松平（後を見送つて）　あゝ、大老の御大難は最早旦夕に迫つてゐる。日頃別懇に願つてゐる私が、それをお救ひすることが出來ないのは殘念至極ぢや。

宇津木　主君のお身の上をいろ〳〵御心配下されまして、誠に忝う存じまする。何を申しましても、一旦かうとお定め遊ばした事は、枉げることも弛めることもふつ〳〵お嫌ひなあの御氣象で、生死の海を一足飛びに飛び越さうとなさつてをりますので、傍からは、唯手をあけてはら〳〵するばかりでございます。御親切の程は、一同忘れはいたしませぬ。

松平　日頃は誠にもの優しい、女子供もなつくお方だが、いざとなつたら、假令泰山眼前にくづるゝともびくともせぬ膽

三河武士　德川家康の本領三河國（愛知縣）出身の武士

の据わつたお人ぢや。死を恐れぬ御覺悟が出來てゐるから、我等が千言萬語も遂に何の役にも立たない。ひよつとすると、今宵はお別れの御酒宴のおつもりではないかな。

宇津木（考へながら）いや、左樣な事はございますまい。……左樣な不吉な御酒宴ではございますまい。宵節句をお祝ひなさるのは、毎年の御嘉例になつてをりますから。

松平　ふむ、……何にしてもまだ四十六七のお働き盛りを、今死なしては惜しいものぢや。右から見れば何者も恐れぬ勇武果斷の三河武士の標本で、左から見ると一切に悟入して生死の淵を越えた禪僧の俤がある。かういふお人には、信發、生涯にもう二度とは逢へまい。幕府の爲にも、又天下の爲にも、大老の御一身に過のないやう、この上はその方等

長野主膳　名は義言　井伊家の臣　國學者、歌人　文久二年歿　年四十八

家臣一同が、皆一つ心になつて氣を附けることより外に途はない。私からも賴む。

宇津木　は、……この上とも、少しの油斷もないやうに一同とも申し合はせて氣を附けるでございませう。

松平　何卒さうして貰ひたい。……長野主膳にもさう傳へてくれ。主膳は今日はどうした。

宇津木　茶室の方に控へてゐる筈でございます。もう時刻も少し遲れました。何卒、殿にも茶室の方へお越し下さいませ。御案内申し上げます。

松平　とにかく、大老のお手前、一服頂戴しませうか。

（井伊大老の死）

土井晩翠
名は林吉
英文學者・詩人
第二高等學校
名譽教授
仙臺市の人
明治四年生

南陽
南陽郡
現中華民國河南・湖北兩省の内

舊草廬
諸葛孔明の舊草廬
南陽郡の隆中山に在つた
隴畝に云々
亮躬畊ニ隴畝ニ、
好爲ニ梁父吟ニ。
（蜀志）

二一　出廬

土井晩翠

嗚呼南陽の舊草廬、
二十餘年のいにしへの
夢はたいかに安かりし。
光を韜み香をかくし
隴畝に民と交れば、
王佐の才に富める身も
ただ一曲の梁父吟。

閑雲野鶴空闊く

雪に驢を驅る
騎驢過小橋、
獨歎梅花瘦。
（三國志演義）

風に嘯く身はひとり、
月を湖上に碎きては
ゆくへ波間の舟ひと葉、
ゆふべ暮鐘に誘はれて
訪ふは山寺の松の影。

江山さむるあけぼのの
雪に驢を驅る道の上、
寒梅瘦せて春早み、
幽林蔭を穿つとき
伴は野鳥の暮の歌、

紫雲たなびく洞の中
誰そや棊局の友の身は。

其の隆中の別天地、
空のあなたを眺むれば
大盜きほひはびこりて、
あらびて、榮華さながらに
風の枯葉を掃ふごと、
治亂興亡おもほえば
世は一局の棊なりけり。

隆中
隆中山
現湖北省襄陽縣に在る

其の世を治め世を救ふ
經綸胸に溢るれど、
榮利を俗に求めねば
岡も臥龍の名を負ひつ、
亂れし世にも花は咲き、
花また散りて春秋の
遷りはここに二十七。

高眠遂に永からず、
信義四海に溢れたる
君が三たびの音づれを

岡も臥龍の云々
所ル居之地有ニ一岡ト名ニ臥龍岡ト因自號爲ニ臥龍先生ト。（三國志演義）

君
劉備
蜀漢の第一世
皇帝
皇紀八八三年
歿

三たびの音づれ
先帝不レ以ニ臣卑鄙ト猥自枉屈シテ三顧臣於草廬之中諮ニ臣以ニ當世之事ヲ。（前出師表）

背きはてめや知己の恩、
羽扇綸巾風かろき
姿は變へで立ちいづる、
草廬あしたの主や誰。

古琴の友よ、さらばいざ、
曉さむる西窓の
殘月の影よ、さらばいざ、
白鶴歸れ、嶺の松、
蒼猿眠れ、谷の橋、
岡も更へよや臥龍の名、

白鶴歸れ云々
叩レ戸蒼猿時ニ獻レ菓、守レ門老鶴夜聽レ經。
（三國志演義）

草廬あしたは主もなし。

成算胸に藏りて
乾坤ここに一局碁、
ただ掌上に指すがごと、
三分の計はや成れば、
見よ、九天の雲は垂れ
四海の水は皆立ちて
蛟龍飛びぬ淵の外。

三分の計
江北の曹操・江南の孫權に對し劉備は巴蜀を保つて鼎立する計
九天の雲云々
九天之雲下垂。四海之水皆立。（杜甫）
〔出所〕晩翠詩抄

安倍能成
哲學者
第一高等學校
長
松山市の人
明治十六年生
淺川巧
朝鮮總督府農
林局山林部林
業試驗所技手
朝鮮古陶磁研
究家
山梨縣の人
昭和六年歿
年四十二

二二 人間の價値

安倍能成

淺川巧さんは、私の朝鮮生活を賑やかにしてくれ、力づけてくれ、樂しくしてくれ、朗かにしてくれる、尊い友人の一人であつた。少くともさういふ友人になつてくれる、又なつてもらひたい人であつた。この人が春の花の咲くのも待たずに逝つてしまつた。私は淋しい。街頭を歩きながらも、この人の事を思ふと涙が出て來る。私は東京に居て、巧さんが危篤だといふ電報を受取つた。さうしてその翌日の夜には、もうその訃報を受取つてしまつた。人間の生死は測り知られぬとはいへ、これは又餘りにひどい。私は、朝鮮に歸るのに、力が拔けたやうな氣がした。

巧さんのやうな、正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れる、獨立自由な、しかも頭腦が勝れ、鑑賞力に富んだ人は、實に有難い人である。巧さんは、官位にも、學歴にも、權勢にも、富貴にもよることなく、その人間の力だけで堂々と生きぬいていつた。かういふ人は、よい人といふばかりでなく、えらい人である。かういふ人の存在は、人間の生活を賴もしくする。かういふ人の喪失が、朝鮮の爲に大なる損失であることはいふまでもないが、私は更に大きくこれを人類の損失だといふに躊躇しない。人類にとつて、人間の道を正しく勇敢に蹈んだ人の喪失ぐらゐ大きい損失はないからである。

巧さんは確に一種の風格を具へた人であつた。丈は高くなく、風采も揚らない方で、卒然として接すると、如何にもぶつ

きらぼうで無愛想に見えた。しかし、親しんでゆけばゆくほど、その天眞な人のよさが感じられ、その無邪氣な笑と巧まぬユーモアとは、求めずして一座を暖にする力があつた。

巧さんは生前よく、「人間は恐しくない」といつてゐられたさうである。人間を畏れない巧さんは、卽ち自由に惠まれた人であつた。さうしてこの自由の半面に、巧さんの類稀な誠實と強烈な義務心とがあつた。巧さんは僅かに四十二でなくなられたが、この自由とかの精刻との調和を具現し得た點に於て、珍しく「出來た人」であつた。

巧さんの仕事を見ると、それはそれ自身の爲になされて、その他の目的の爲になされることが極めて少かつたやうに思ふ。

右の手の云々　汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隱れん爲なり。然らば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。（新約聖書）

八ケ嶽　長野・山梨兩縣に跨がる

南麓のある村　山梨縣北巨摩郡甲村

兄君　淺川伯敎　朝鮮古陶磁研究家　明治十七年生

巧さんには、右の手のしたことを左の手に知らしめぬといふ風な所があつた。平生家人を戒めて、決して人に物をやつたことをいつてはならないといはれたさうである。これも、行爲を行爲そのもの以外の何物にも託すまいとする道德的潔癖から來たものであらう。

巧さんの感情に細やかだつたことについては、涙の催される插話がある。巧さんは明治二十三年十一月に八ケ嶽南麓のある村に生まれられたが、この世の光を見られた時にはもう父君がなかつた。小さな巧さんの、父君に對する思慕のいたいけさは、兄君に父君の顏の記憶があることを羨み、母上に向かつて、「出入りの柚を父さんといつてよいか」と聞き、又その姉君に語つて、「若しお父さんの顏が見られたら、眼が一つつぶ

農林學校　山梨縣立農林學校　甲府市に在る
小林區署　秋田縣北秋田郡大館町に在つた大館小林區署

れてもいゝがなあ」といふに至らしめたさうである。

巧さんと兄君との兄弟仲は、世にも羨ましいものであつた。兄君は巧さんよりも六歳上であつたが、巧さんは小さい時からよくこれに兄事してその意に反くことがなかつたと聞く。嘗て、兄君が赤痢を病んで歸養してをられた時、巧さんは兄君の爲に、朝早く產みたての卵を附近の農家に求め、又自分で裏の藪から竹を伐つて來て簗を作り、それを水田のはけ口にしつらへて、病後の兄君の爲に泥鰌をとらうとしたさうである。

その後、巧さんは農林學校を卒業して、秋田縣下のある小林區署に赴任されたが、その時母君が餞別に下さつた金を、「卒業したら世話はかけぬ約束だ」といつてどうしても受取らず、ひそかにそれを佛壇に置いて赴任されたといふ。母君はその

時の巧さんを「にくい奴だ」といはれたさうだ。この頑固な獨立心、さうしてあの細やかな溫情、この二つは最後に至るまで巧さんの性格を形づくる本質的要素であつた。

巧さんが朝鮮に渡つて總督府の山林部に勤められるやうになつたのは、大正三年五月、巧さんが二十四歳の時であつた。それから後十八年の歳月は、巧さんを深く〳〵朝鮮と結びつけて、永久に離れられぬものにしてしまつた。しかもこの十八年の勤勞を以てして、巧さんは、死ぬ前、判任官の技手に過ぎなかつた。精勵恪勤にして有能類稀な巧さんの樣な人に對する待遇として、誰がこれを十分だといはう。しかし巧さんの如きは、如何に微祿でも、卑官でも、その人によつてその職を尊くする力のある人である。巧さんがこの地位にあつて、そ

の人間力の尊さと強さとを存分に發揮し得たといふことは、人間の價値の商品化される現代に於て如何に心強いことであつたらう。　私は巧さんの爲にも、世の爲にも、寧ろこの事を喜びたい。

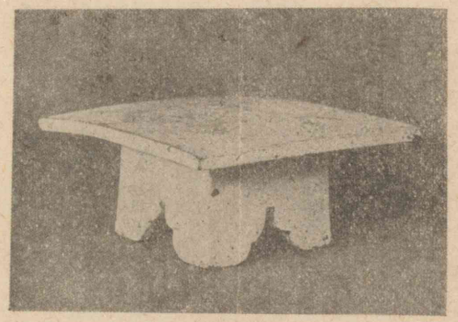
兄君は、「生前に何とかして官途をはなれて自由に働かしてやりたかつた」と述懷されたと聞く。　兄君の心として、巧さんの才能と氣質とを解する人として、この思に誰か同感せぬものがあらう。　けれども、巧さんは恐らく自分の技手としての仕事にも、多大の愛著を持つてをられたのであらう。　私は、巧さんが生前總督府山林部の林業試驗所でどういふ仕事をしてをられるのか、詳しくは知らなかつた。　死後になつて、それが種を蒔いて朝鮮の山を青くする仕事であつたときいて「是

あるかな」と思はざるを得なかつた。　それは實に朝鮮にとつて最も根本的な仕事であつた。「種蒔く人」であつたことは、外の如何なる役目よりも巧さんにふさはしく思はれる。

巧さんが藝術愛好者であつたことはいふまでもないが、巧さんには藝術愛好者の動もすれば陷りやすい放縱懶惰の弊はなかつた。　巧さんの一面には、堅固な道德的性格の犯すべからざるものがあつた。　林業試驗所の種樹の仕事には、巧さんの參畫が實に大であつたと傳聞してゐる。　巧さんはその仕事の爲の出張中に病を得られたが、それでも努めて役所に出勤し、臥床されてからも、猶床上で事務を見られたといふ。　さうして、熱が高いのに、病間を利用して依頼された雜誌の原稿まで書かれたといふ。　こゝに至つて、私は巧さんの義務心

の餘りに強かつたことを恨とせざるを得ない。

巧さんは藝術の鑑賞に勝れてゐたばかりでなく、又手先の器用な人であつた。休日の手すさびに試みられたらしい彫刻などには、まことに掬すべきものがある。



朝鮮陶器（祭器）

かういふ素質は、巧さんの祖父君から傳へられたと聞いてゐる。祖父君については、巧さんはその著書をこの祖父君四友先生の靈に捧げ、心のこもつた詞を卷頭に掲げてをられる。人は逝いてその書は世に出でようとしてゐる今日、この獻詞を讀んで感慨を禁ずることの出來ぬのは、私ばかりで

その著書
朝鮮の膳
昭和四年刊

はあるまい。

藝術を愛する巧さんは、又自然を愛する人であつた。巧さんの終焉の地であつた清涼里の官舍の近くは、京城附近にも稀な清らかな美しい一郭である。巧さんは、夜如何に遅くなつても、この家に歸らぬことはなかつたといふ。さうしてあの森の中の道を歩みつゝ、自然とのひそやかな會話をこの世に於ける上なき樂しみとせられたといふ。

骨董を愛翫する者は多い、しかし眞に藝術を愛する者は少い。けれども藝術を愛するよりも更にむづかしいのは、人間を愛することである。多くの藝術愛好者もしくは愛好者と稱する人々は、神經質な、氣まぐれな、人間愛好者もしくは嫌惡者であり、我が儘なエゴイストである。しかるに、藝術の愛好

清涼里
朝鮮京畿道高陽郡崇仁面清涼里
京城府の東郊
京城
京城府
朝鮮總督府所在地

者であり、獨立不羈の性格者であり、自分只一人の境涯を樂しむすべをかほどまでも解してゐた我が巧さんは、實にまた類稀な、同情の豐な人であつた。さうしてそれは、朝鮮人に對して殊に強く現れたのであつた。

巧さんは人の爲にしたことをめつたに人には語られなかつた。けれども、巧さんの助力によつて學資を得、獨立の生活を營み、相當の地位を得るに至つた朝鮮の人は、一人や二人ではなかつたさうである。巧さんの死を聞いて集つて來たこれらの人々の、慈父の死に對するやうな心からの悲しみは、見る人を惻々と動かしたといふ。私も亦その一人を見た。彼は、巧さんを本當にお父さんよりも懷かしく思つてゐたといつた。さういふ彼の顏には掩はれぬ誠が見えた。巧さんは、

里門里
崇仁面里門里

カント
1724—1804
ドイツの大哲學者

恐らくその眞直な曇なき直覺で、人の氣づかぬ朝鮮人の美點を見出されたのであらう。巧さんの心は朝鮮人の心を摑んでゐた。その藝術の心を摑んでゐたやうに。

親族・知人が集つて相談の結果、巧さんの遺骸に白い朝鮮服を著せ、重さ四十貫もあつたといふ二重の厚い棺に納め、清涼里に近い里門里の朝鮮人共同墓地に土葬したことは、この人に對してふさはしい最後の心やりであつた。里門里の村人の、平生巧さんに親しんでゐた者が三十人も棺を擔ぐことを申し出でたが、里長はその中から十人を選んだといふ。この人達が朝鮮流に歌をうたひつゝ棺を埋めたことは、誠に強ひられざる內鮮融和の美談である。

巧さんの生涯は、カントの論じたやうに、人間の價値が實に

人間にあり、それより多くも少くもない事を實證した。私は心から人間淺川巧の前に頭を下げる。

（青丘雜記）

國語　卷六　終

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月四日發行
昭和十二年十二月十八日訂正再版發行
昭和十六年十月十五日新訂第一刷印刷
昭和十六年十月十九日新訂第一刷發行

國語　全十卷
定價各册金五拾五錢

編輯者　岩波編輯部
代表者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄
東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎
精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
電話九段（二）一八七・一八八番
振替口座東京二六二四〇番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

（三）福製本）8ノ1

版權所有

文庫
41
251
広島大学図書
2000302251